730
229

羊門文庫
9

富の増進

江原萬里著

羊門社刊行

0019058000
0019058-000
730－229
富の増進
江原万里・著
羊門社
昭１３
ADA

730
229

羊門文庫

9

富の增進

江原萬里著

羊門社刊行

742
帝國圖書館藏

羊門文庫

9

富の増進

江原萬里著

羊門社刊行

730
229

イエスいひ給ふ——

まことに誠に汝らに告ぐ、我は羊の門なり。……おほよそ我によりて入る者は救はれ、かつ出入をなし、草を得べし。……わが來るは羊に生命を得しめ、かつ豐に得しめん爲なり。我は善き牧者なり、善き牧者は羊のために生命を捨つ。

（新約聖書ヨハネ傳十章）

序

聖書は云ふ。「まづ神の國と神の義とを求めよ、然らば凡てこれらの物（生活必需品）は汝らに加へらるべし」（マタイ傳第六章第三十三節）と。然るに古き經濟學は云ふ。「人は皆各最も良く自己の利害を知る。されば各人皆自由に自己の利益を追求せば全社會の福祉は最も良く增進する」と。それ故純然たる利己的人物を假想し、其の自由なる營利的行動とその結果とを研究したのである。これカーライルが罵倒した豚哲學である。聖書の經濟觀と相去ること西の東から遠きが如くである。

此の經濟觀は現代に於てマルクスの社會主義が繼承發展せしめた。彼は社會組織の基礎を衣食住に在りとし、之を生產する生產力の變化が社會を改造する。その上層建築なる道德宗教文化は皆此の物的生產力の發展に從つて變化する。されば勞働者が衣食のためにする凡ての鬪爭的行動は人類に眞の自由を齎す所以であると。

730
229

然るに輓近經濟學の趨勢は次第に聖書的經濟觀に接近しつゝある。進歩せる經濟學は最早社會主義又は自由主義を唱へない。社會制度でなく社會その物の進歩、物の量でなく人間の自由を唱へる。「安息日は人のために設けられて、人は安息日のために設けられない」（マルコ傳第二章第二十七節）ことを認める。嘗てラスキンが云つた、

生命以外に富はない――愛し喜び崇ぶ力の凡てを含む生命がそれである。

富とは丈夫が有つ價値ある所有物である。

ことを否認しない。近代の英國經濟學の泰斗アルフレド・マーシヤルは云ふ。

經濟學は輓近次第に人間の福祉研究の一部となつて來た。其の精神はプラトーの論語のそれに近づき、其の色々の研究方法はベーコン、ニユートン及びダーウインのそれに近づいたと。

思ふに現代生活の最大强敵は貧乏ではない。「貧しき者は常に汝らと偕に居れり」（ヨハネ傳第十二章第八節）である。現代の最大脅威は實に靈的貧乏に在る。今から五十年前に比べて、我等の物的生活は一變し、其の豐富になつた事は驚く

べきである。電信電話ラヂオ、汽車汽船電車、電燈瓦斯石炭、活動寫眞にカフエーにバー、我らは數片の白銅貨を以て一日の娯樂に耽けることが出來る。然も之を以て人は少しも滿足しない。他人が自分より餘計に樂しむことを憤り、自分は他人よりも餘計に樂しむことを誇り、互に嫉妬、猜疑、分離、鬪爭、掠奪、殘害をして居るのである。此の靈的貧乏の往く先は滅亡以外にない。「人の生命は、所有の豐なるに因らぬなり」（ルカ傳第十二章第十五節） ある。さらば今後此の地球を相續する者は誰か。

嘗てロマ千年に亘る大帝國の存續は決してその武力に由つたのではない。史家ニーブールの言ふ如く「矛を以て獲た土地は矛を以て失はれる。唯鋤を以て獲た土地は失はれることがない」と。「幸福なるかな、柔和なる者、その人は地を嗣がん」（マタイ傳第五章第五節）である。

武を以てせばユダヤ人は地上最微の民族である。彼等は周圍の民族に征服せられて一度ならず國滅び、民は他國に移され、今尚世界に四散し流浪してゐる。然も往時の大帝國と大國民とが今や悉く跡方なく滅亡したに拘らず、此の民族のみ

が尙世界的一勢力として存續して居るのは何によるか。彼等の商才によるのではない。實に彼等の信仰に因る。

英國民が今日日沒を見ない大帝國を建設したのも亦決して彼等の商才ではなかつた。由來アングロ・サクソンは決して商業的天才ではない。然るに英米兩國が世界產業界の指導者たり得たのは彼等の祖先に淸敎徒があつたからである。

今や時代は太平洋を圍んで世界の諸勢力が東洋に集り、互にその優越を競ひつつある。孰れの民族が將來此の地の承繼者となるであらうか。日本國民の將來や奈何。私は確信する、我が國民が此の太平洋時代に世界歷史に貢獻し、民族としての使命を完うすることを得しめるものは主イエス・キリストを信ずる信仰であると。信仰が今も昔も將來も此の地を嗣ぎ得る、是私の云ふ聖書的經濟觀である。

昭和六年四月

鎌倉扇ヶ谷の寓居にて

江原萬里

目次

一、富とは何を云ふか…………………………九
二、二つの反對論…………………………二九
三、富の最大量…………………………四三
四、適者生存…………………………六一
五、富の增進…………………………七七

一、富とは何を云ふか

一

一千七百七十六年、近代經濟學の創立者であるアダム・スミスが其の劃期的大書に「諸國民の富の性質、及び原因の研究」と云ふ表題を與へて以來、經濟學は主として人類社會の「富」を研究する科學であるとせられて來た。然るに此の科學を一般には「富學」と云はずして、英國は勿論、其の他の諸國でも皆ポリチカル・エコノミー、卽ち、政治經濟學と稱せられるのは、其の始め此の二つは同じ意味であつたからである。エドウヰン・キャナン教授によれば、スミスが其の著書に此の言葉を其の表題としようとしたところ、丁度其の十年前に、ステウアート（Steuart）が、自著に題するに「ポリチカル・エコノミーの原理の研究」（An Inquiry into the Principles of Political Economy）と云ふ語を以てし、ポリチカルの語を附けることによつて國民全體の富を論ずるものであることを示した。それ故スミスは此の名稱の使用を彼に先取りされたやうに思つて、之と同じ意義

をもつ語である「諸國民の富の性質及び原因の研究」（An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations）と云ふ語を其の大著の表題とした由である。諸國民の富の研究と云ふも、經濟學（ポリチカル・エコノミー）の研究と云ふも、共に社會一般の富の研究と云ふに同じかつたことは之でも明白である。

かやうに、經濟學は始めから人類社會の富の學問であり、其の部門である生産とは富の生産であり、分配とは富の分配であつた。然らば富とは何か、此の事が明白でなければ、富の生産と云ひ分配と云ふも亦其の意味がはつきりしない。經濟學を研究する者は先づ富とは何であるかをはつきりしておかなければならない。

富とは、前に云つたやうに英語のウエルス Wealth の譯語である。キャナン教授によれば、ウエルスの語源はウヰール（Weal 幸福）から來り、總て語尾にス（th）がついて居るものは或る一つの狀態を示すものであつたとのことである。丁度我國語の「さ」に等しい。例へば健康 Health は癒されたる heal の狀態 th、

即ち健かさであり Strength は Strong から來て强さ、Length は long から來て長さである。故にウエルスは其の始め富める狀態即ち福ひなる有樣を指す語であつた。されば千六百十年頃公にせられた英國欽定譯聖書（A. V.）中エステル書十章三節に

For Mordecai the Jew was next unto King Ahasuerus, and great among the Jews, and accepted of the multitude of his brethren, seeking the wealth of his people……とあり、スコツフヰルドのレフアレンスによれば、此 seeking the wealth of his people はネヘミア記の二章十節に在る to seek the welfare of the children of Israel と同意味である。即ち Wealth は Welfare である。

此の箇所の日本譯の聖書によれば

ユダヤ人モルデカイは、アハシユエロス王に次ぐ者となり、ユダヤ人の中にありて大なる者にして、其衆多の兄弟によろこばれたり、彼はその民の福祉を求め……

とある。其の原語及び譯語の現す通り、ウエルスとは元來福祉であつた。民のウエルスを求むとは國民の福祉を求むることであつた。それ故、若し原語本來の意味に從へば國民の富の研究とは國民の福祉の研究でなければならない。

二

然るに此の富即ち福祉は種々なる財産を所有し、又年々歳々受入れる收入と密接の關係がある。人が富んで「さいはひ」なのは金銀、家屋、田畑、米麥、衣服など物の豐かなことに由ることが多い。アダム・スミスが「諸國民の富」を書いた頃には此の富ウエルスは旣に本來の意義を失つて「さいはひ」なる狀態を云はず、かかる狀態を來らしめるところの前述の種々なる財の集りを指すやうになつたのである。

それ故、或者は國の富は金銀等の貨幣の多いことであると云ひ、國富を增すには國際貿易を盛にし、殊に輸出を奬勵して金銀の流入を計らねばならないと主張

した。其の當時の事情からせば此の說は一概に不當と云ふことは出來なかつた。何となれば、其の當時は土地を除いては金銀以外に値打ある物は殆どなかつたからである。然に或る者は此の說に反對して人は一物だに創造する事は出來ない。物を生ぜしめるものは自然の力である。それ故ただ物の形を變へ、場所を移轉し又賣買して所有者を代へたとて富は增さない。國の富は自然が生產するのであつて、これを增さうとせば農業を奬勵して土地から產出する物の增加を計るべきであると主張した。これは確に大なる進步であつた。それは個々の物からその生產の方面に注目せしめたからである。アダム・スミスは國の富を金銀等の貴金屬と見る說に强く反對し、後の說卽ち農產物と見る說には同感しつつ、更に之に工業的見地を加へ、此の農產物に加工しても亦富は增すと云ひ、富とは金銀ばかりを云ふのではない、土地とそれから勞働とが年々產出する物を云ふと主張したのであつた。

三

然し乍ら其の何れにしても、富とは個々の物の集合を指し、本來の語の意味である其の物が人々に與へる精神的の效果を指すものではなかつた。ところが其の後種々なる經過を辿つて、最近では經濟學の研究主題は此等の個々の物それ自體でなく、寧ろ此等の物が人に及ぼす效果を研究するやうになつて來たのである。

何故かやうな經過を辿つたかと云ふに、先づ個々の物の集合は其の種類が多種多樣なればなるだけ、之を合計し富の總量を計算し、又その增減を測定することが困難である。例へば舊約聖書にあるヨブの財產は其の始め羊七千匹、駱駝三千匹、牛五百耦、牝驢馬五百匹あつたが、晚年には羊一萬四千匹、駱駝六千匹、牛一千耦、牝驢馬一千匹に增加したとある。此の場合には總てが二倍となつたのであるから其の計算は困難ではない。ヨブの富は一生の中に色々の經過をして遂に二倍となつたと云ひ得られる。然るに若しこれらの家畜の內、或物が著しく增加

し他の物が著しく減少したとしたならば、ヨブの富は其の總體では一體增加したのか或ひは減少したのか、之を測定する事は難かしい。只此の場合貨幣を以て各種の物の價値を評價しそれを合算することを得ば、其の時始めて其の富の增減を知ることが出來る。

それ故經濟學の研究の目的である富を以て此等の個々の物の總數量とせず、貨幣の評價によるその物の價格の總量とせば、上記のやうな研究の困難は免かれ得よう。こゝに至つて富は物でなく、貨幣で計られたその價値を言ふことになつた。然るに此の貨幣の評價額も亦決して正確でない。何となれば貨幣は其の流通する數量により又其の他の種々な原因によつて、自分自身の價値が常に變動するものであるから、かゝる不安定な尺度で測定して得た物の價値が正確であらう筈がない。よし假りに貨幣の價値は少しも變動せず、又其の變動の割合を常に正確に知り得るとしても尙、貨幣評價額はあてにならない。何となれば人々の境遇により、又時期により、又場所によつて同價額が人々に及ぼす效果は常に同一でないから

である。例へば一萬圓の住宅は百萬長者には殆ど何等の愉快を供しないが、中流階級の者には多大の愉快を供し、下層階級には金殿玉樓に棲む心地がするであらう。又同じ一萬圓でも現在の所有は之を將來所有することよりも遙に有り難いのである。同樣に何人も手許にある一萬圓の方が遠方例へばロンドンやパリに置いてある一萬圓よりも好都合であることを知つて居る。かやうに同じ一萬圓の價値も人により、時により、所により同一の效果を示さない。

抑も人が貨幣を得ようとするのは貨幣其の物を求めて居るのでなく、貨幣を得ば之によつて自分の欲する物が得られるからである。然らば人は何故物を得ようとするかと云へば、之によつて自分の種々の欲望を滿たし得るからである。若し物に此の力がなければ人はそんな物はほしがらない。人が物を多量に得度く思ふのはそれで多量に自分の欲望を滿たし得るからであつて、若しさうでなければ決して人は多量に物を欲するものではない。彼等の目的は自分の欲望の滿足であつて、貨幣や之により得られる其の他の物は此の欲望滿足の手段に過ぎない。

四

或物が人の欲望を滿たし得る力を有するとき、此の物は效用を有すと從來云ひ來つた。效用とは物が人の欲望を滿たし得る力である。ある一定の物に如何程の欲望を滿たし得る力があるかは、人がその物を如何程迄ほしがるかによつて定まる。それ故物の有する效用の量は其の物自身の內に內在する其の物の固有性でなく、人が其の物を欲求、尊重、愛惜する程度である。

人は自分の欲する物を造り、之を費消してそれで欲望を滿足するのであるが、元來人間は天地の間一物と雖も之を無から有にすることは出來ず、又有から無にする事も出來ない。人が自分の欲望を滿たさうとして物を造るとは物を創造することでなくして、自然が生ぜしめた物を採集し、變形し、場所を變更し、以て自分の好む狀態に變へることを云ふだけのことである。之を換言せば人は物を創造するのでなく、物の效用卽ち前に述べた其の物が人の欲望を滿たし得る力を創造

し、或は此の力を增加するのである。此の效用の創造增加を生產と云ふ。そして人が效用を創造した物を財と云ふ。財は效用を有する物卽ち人の欲望を滿たし得るところの物である。

又此の財を以て人が實際欲望を滿たした時之を消費と云ふ。それ故消費とは物を有から無に歸せしめることでなくして、只財を使用する際其の財の有して居た效用を消盡することである。若し此の際物が消耗したならばそれは人が之を無に歸せしめたのではない。使用中自然が其の物の形を奪つて仕舞つたまでである。物が效用を失つた時、最早それは財でなく、只の物であつて、經濟學の圈外に出て行くのである。

現今學者の通說によれば富とは物の集合を其儘指さない。又物の貨幣の評價額を指さない。效用ある物、卽ち財を指す。但し財は皆富を形成するのではない。財の內只交換し得るものより成る。そして「交換し得る」と云ふ事によつて、精神的財、卽ち家族友人の愛情等の如きものと區別する。富を形成する財は多くは

物的財であるが、必ずしもそればかりを云はない。人の奉仕、例へば醫師の診察、辯護士の辯護等の如きは之を金錢と交換し得られる。故に之は物でなくとも經濟財とする。又經濟財は交換し得ると云ふ事により此の經濟財の內、何人にも同樣に屬するもの、例へば空氣や太陽の光線などを除外する。

マーシャルの定義によれば、「富とは財の內所謂經濟財のみよりなり、經濟財とは人の外部に存在し、彼に屬するものであつて、然も何人にも一樣に屬しない、故に明らかに彼のものと云ひ得るものでなければならない。此の財は直接には貨幣を以て計量し得る。此の計量は一方には、此の物を生ぜしめた努力及び犧牲を表示し、他方には此の物が滿足せしめる欲望を表示する」と云つて居る。

マーシャルの此の語は我等をして富の他の一方面に眼を轉ぜしめる。富を測るには財の欲望の滿足力を測ると同時に、他方此の欲望を滿たす力を生ぜしめる爲に費した人類の勞苦を測らねばならないと云ふ事之である。此の勞苦も效用と同樣に物自體に內在固有するものでなく、人が之に費した心身の努力犧牲であつて、

我等の心の働に外ならない。かやうに經濟學で研究の對象となつて居るものは物自體でなく、此の物に對する人の心的狀態であることを知るであらう。

經濟財に對する人の心的關係には人の欲望滿足の方面と、そのために必要な人の勞苦の兩方面がある。若し人の物的生活に於て、此の欲望滿足の量が多く然も之がために要する勞苦の量が少ないならば、例へば、現在の社會全般の物的欲望が八時間の勞働を要しないで四時間の勞働で足るとせば、人の物的生活はそれだけ裕福である。殊に人の感ずる勞苦の量は加速度を以て增加するを常とする、八時間の勞働の勞苦は決して四時間のそれの二倍ではすまない。此の故に人の經濟的活動は、常に最少の犧牲を以て最大の效果を擧げようとして居るのである。されば、人の經濟的活動の眞の目的は外なる物其のものの獲得使用ではなく、寧ろ此の獲得のための勞苦をなるべく少なくし、なるべく多くの欲望を滿足しようとすることにある。此の目的に成功すればする程、人の物的生活狀態は良好である。

五

されば若し一般學者に共通の定義により、富とは上述の如く經濟財の集合であるとせば、現代の經濟學は此の富の外に尙、此の富と人との關係、卽ち人に及ぼす效果をも併せて硏究しつゝあるものである。マーシャルは經濟學を以て「一面には富の硏究であり更に重要なる他の方面では人の硏究の一部分である。何となれば、人の性格は日々の仕事及び之により得る物資により造らるる事、宗敎的理想以外には他の何物にも優つて多かつたからである」と云つて居る。經濟學に此の二方面がある。然るに經濟學の中心點は、次第に其の一方面である經濟財から、之が人に及ぼす效果の方面に轉じ來つた事は前に述べたことを以て略ぼ推知せられ得るであらう。マーシャル自身も亦他の處で、「經濟學は獨逸及び其の他の國に於て時々『國民經濟』と呼ばれ、其の當初は多分に個々の國民の物質的利益に關係した、殊に貴金屬の輸出入に就いてさうであつた。然るに經濟學は其の後次第

に、人類の幸福なる狀態の硏究の一部となり、其の精神はプラトンのダイヤローグのそれに近づき、其の硏究方法はベーコン、ニウトン又びダーウキンのそれに近づいた」と云つて居る。

故に、此の經濟學を今尙ほ富の科學と云ふことは正當でない。然も强いて此の學問を富の學問と云はうとするならば、富とは經濟財の集合なりと云ふ上記の定義を捨ててキアナン敎授の言ふやうに、富とは此等の經濟財でなく、それが人々に及ぼす效果、從つて人類の物的生活の幸福な狀態を云ふものとする外はない。若しさうするならば、富の語義は其の原語である英語ウェルスの本來の語義、心身の一狀態であつて物的の福祉 Welfare 又は Welbeing と同一の意味に復歸するものとなる。又若し富を舊來の定義に於て維持しようとせば富は最早經濟學の中心であり得なくなつた。經濟學を以て富の科學といふ事をやめて、ピグー敎授が其の著書に題したやうに、福祉の經濟學 (The Economics of Welfare) とでも云つた方がよい。

かやうに富の學問である經濟學は最初は物の集合を富として研究したが、その總量の計算、增減の測定が困難な事情よりして、其の物の貨幣評價額の研究となり、貨幣の評價は貨幣自體の價値が常に變動し、測定困難であるばかりでなく、同一價格の物が各人により、又同一人でも時と場所とにより同一の效果を與へず、其の者の欲望滿足力に差あり、又假令欲望滿足量は同一でも、之を生產するために費す勞苦は必ずしも同一でないことからして、經濟學の研究の重心は次第に物から此の物が人に與ふる滿足とそのための勞苦とに轉じた。人は物を造り又之を消費する際貨幣額に注意はするが、其の行動の根本は常に最小の勞苦を拂ふて最大の欲望滿足量を得ようとして居る事實に着目し、之を經濟學の研究主題とするに至つたのである。

それ故現今では經濟學の研究の主眼點は人類の物的良好なる生活狀態の研究となり、之は經濟財の欲望滿足力と、之を得るために拂つた勞苦との差額で測るやうになつた。物の欲望を滿たし得る力を「效用」と云ふに對し、之を得る爲に要

する努力及び犧牲、即ち勞苦を「非效用」即ち生產費と云ふならば、現今經濟學上人の物的幸福程度は經濟財の效用から非效用を引き去つた差額を云ふのである。然らば、此の物的幸福狀態の向上とは此の效用が多くなるか、非效用が少なくなるか、或は二つが共に生ずるかによつて測定せられ、社會に於ける物的欲望の滿足量が多くして之がために要する勞苦が少なくなればなる程社會の物的福祉の增進である。本論に於ては私はキヤナン教授にならひ、在來の通說によらず此の狀態を富と云はうとする。

然らば富の本質は轉々して本來の語義である心身の一狀態であり福祉、即ち物を以てする人の物的生活狀態の良否に復歸したこととなる。現代經濟學の研究の主題は此の物的生活の狀態である。故に人類の最も普通にして最も平凡なる生活の研究である。マーシヤルは經濟學を定義して「經濟學とは日常業務の生活に於ける人類の研究である。それは、福祉に必要な物資の獲得及び使用に最も密接に關連する部分の、個人的及び社會的活動を審査するものである」と云つた。

六

人類の日常生活、殊に日々の業務の內に於ける人の行動は平凡であつて、そこには高き宗教的熱情も、深き哲學的の思索も殆どない。こゝにはインスピレーシヨンはない。我等は現在の富の內に人類の活動の最も非凡なるものを求めて失望する。勿論一般に人類の社會生活の調子を高められ、我利我欲によらず、公共的精神の發露を事業經營に見ることも少くはないけれども、我等の度々見るところのものは、これでない。寧ろ、貧しき者、賤しき者、又卑劣なる者の群と其の行動である。人類活動の歷史は悠久であり、現代は其の文明の集積を誇る。されど此の總ての文明の精華を以てして人類の物的生活は決して良好とは云ひ得ない。世界最富國と稱せられる英國の首都、世界經濟の中心地、倫敦に於てすらチヤールズ・ブースによれば其の市民の三割は貧民であるとのことである。現文明の齎した榮華の極なる倫敦に於てすらさうである。世界各地の人類の物的生活狀態は

甚だしく貧困であると云はねばならない。何故に果して然るか。經濟學卽ち富の研究は諸國民の此の狀態の「性質及び原因の研究」である。

コントは「同情は問題を提起し、理智は之を解く。理智の適する唯一の場所は同情の下僕となるにあり」と云つた。理智が果して總ての問題を解き得るや否やは別として、富の研究が我等に社會的同情を起させるのではない。ピグー教授が言ふやうに、人類に對する、殊に多數の貧しい者に對する同情こそ、此の研究を敢へてなさせるのである。富の研究を刺戟するものは、人類に對する愛である。若し此の外に尚一つありとせばそれはマーシャルが云ふやうに「健全なる想像」であらう。

二、二つの反對論

一

前節に於て經濟學の中心は物でなくして血肉を具備する人の生活の一方面であり、若し之を富と云ふならば、經濟學の研究主題であるところの富とは人類の物的幸福又は良好なる狀態を言ひ、此の狀態は經濟財の效用から非效用を減じたるものを以て測定算出される。卽ち物的幸福狀態とは人々の物的欲望の滿足量が、之を得るために努力犧牲を拂つて尙、餘りあることを意味するものである事を說明した。從つて富の增進とは此の狀態の增進であり、富の減少とは此の狀態の減退であつて、之を效用及び非效用（卽ち生產費）双方の增減差額を以て測る事が出來ることを述べた。此の說明に對して直に二つの反對論が提出されることを豫期し得る。

一、かかる狀態は人類の眞に幸福又は良好な生活狀態と云ひ得ない。

二、假令此の狀態を物的福祉と云ひ得ても、それは人々の主觀的狀態であつて客觀的に正確な測定が出來ない。從つて科學的研究は不可能である。

二

第一の反對論　卽ち上記の說明のやうに、欲望の滿足と之が爲に忍んだ勞苦の差額を富と云ふならば、此の說は人類はなるべく多くの快樂を求め出來るだけ苦痛を避けるものだと云ふ前提から出發して居て、利己心の發達及び其の滿足を研究の主眼とするものと云はねばならない。然るに、人類の活動中經濟的活動が如何に物質的であり、利己的分子が多いとしても、尙悉くが利己的であり得ない。且又、人は決して快樂をのみ追求し、又苦痛は總て之を避けようとするものでもない。彼等は利己的動物であるが、又愛他的の動物でもある、若し果して然らば人類の幸福なる狀態と云ふ此の富は、眞に人間の良好なる狀態を云ふものではない、ここに云ふ富は人の眞の幸福と似ても似つかぬものである。

此の反對論に對する答は容易である。茲に云ふ富とは物的生活の福祉を云ひ、

それは財の欲望滿足量から之を得るために要した努力犧牲量を控除した殘額を以て測定し得ると云ふのは、かのベンタムの功利哲學に云ふやうに、幸福とは快樂の存在及び苦痛の不存在又は快樂が苦痛に超過する量を云ふとするのと同一ではない。嘗ては經濟學はベンタムの快樂說の上に建てられた學問であるかのやうに誤解されて來た。それ故ここに云ふ物的生活の福祉も亦ベンタムの云ふ幸福と同一視する者も少なくないが、それは明白に誤解である。

茲に云ふ欲望滿足量は必ずしも快樂殊に自己の快樂たるを要しない、欲望とは只利己的欲望をのみ云ふものでもない。經濟學で研究する欲望は只經濟財によつて滿たされ得るものである限り、其の欲望の動機は之を問はない。人の物的欲望の動機は多種多樣である。最も低く最も一般的であるのは自己の生存慾であるが、彼に虛榮心あり、活動慾あり、又他に對する慈善心もある。人は大體利己的動物であるが、然し其の利己心たるや純然たる利己は少なく、其のうちに己が家族に對する愛情、友人に對す友情、又一般社會に對する公共心の微量を混入しないも

のは殆どない。嘗ては經濟學はヂツケンスの小說に出て來るやうな單純に利己的動機のみによつて行動する所謂經濟人 homo economicus を假想して、此の假想人物の行動を研究した。現今の經濟學は決してかやうな假想人物を研究して居るのではない、現實に我等の見聞する人間の物的生活を研究しつつあるのである。

然し乍ら人は皆十人十色であり、人心の異なるのは其の面の異なるが如く多樣である。之を一人一人研究するわけにゆかない。それ故現代の經濟學は最もありふれた意味で代表的な人物を選擇して其の行動を觀察し之を研究するのである。かゝる人物は決して高尙な人物でなく多分に利己的であるのは疑ひない。只それが全然利己的動機のみで行動する經濟人でない事は勿論である。現代の經濟學は此の現代的代表人物が種々なる動機から財を欲望し、生產し、消費する其の欲望滿足量と努力犧牲量とを研究するものである。

之を要するに欲望の動機の倫理的評價は經濟學で研究する物的生活の福祉に直接關係しない。そこに經濟學が倫理學と分野を異にして同一人物を研究する特色

がある。此故に經濟學は人の生活の一方面を研究するものであつて其の全面ではない。その結論は其の方面に於ては信頼すべきものであるが、之を以て人生全體を律することは出來ない。故に必ず終りには倫理學の分野に入ることを避けることは出來ない。

三

努力犧牲量の輕減についても亦快樂說の上に立つて之を云ふのではない。人は欲望を滿たさむが爲に努力し犧牲を忍ぶ。勞苦多ければ後次第に之を避けようとするのは人の天性である。勿論、之を避けようとする念の强さは人々皆異なり、或場合は「苦痛の道」を擇び取ることもある。「憂き事のなほ此上に積れかし、限りある身の力ためさむ」と欲するのは、經濟的方面の欲望でなく、この問題に直接關係はないが、經濟財の獲得に要する努力及び犧牲を惜まず、何等報酬なくして之を爲すことがある。此事あるのを理由として財の獲得に要する努力及び犧

牲を回避し度いとの念が存在することを否定する事は出來ない。又之を輕減しようとする事は不道德とも云ひ得ない。何となれば人の欲望及び願望は多種多樣であり、之を滿たさうとする人の精力には自ら限界がある。故に個々の欲望又は願望に對しては之を滿たさむが爲の努力及び犧牲の量を節約しようとするのは合理的である。

經濟財に對する欲望と云ひ、其の滿足と云ひ、又之を得むがための努力犧牲と云ひ、それを回避せむとする念と云ふも、何等快樂說を採らなければ之を認め得られないものではない。但し既に述べたやうに現在の人の性質を以てしては人類の日常生活殊に其の業務的活動の內には利己的分子が多く、自己又はその近親の物的快樂を生活の目的とするものが多數であることを認めざるを得ないであらう。

四

第二の反對論　卽ち富にして若し此の如きものとせば、富は主觀的のものであ

つて、人の欲望と云ひ、其の滿足、又は之を得むがための努力犠牲と云ふも、各人悉く其の心理的內容を異にし、或る事に際し人々が歡喜し悲哀するその如く、之を感じない者には其の心を測り難く、客觀的に觀察測定は不可能であつて、從つて學問として研究し得ないと云ふ反對に對しては「然り、又否」と答ふる外ない。

若し論者の反對するやうなものを經濟學の研究の主題とせば、それは客觀的觀察の不可能のために學問としては成立し得ないこと勿論である。我等は欲望の心理的內容を測ることは出來ない。各人のそれを比較することも出來ない。合計することは勿論出來ない。社會に於ける滿足量の增加と云ひて、滿足を直接に測るべき何等の方法もない。努力及び犠牲と云ふも亦同樣である。然るに我等は欲望其の物を測る事は出來ないが、欲望の强さは客觀的に測り得られる。但し直接に之を測り得るのではなく只間接に測り得られるのである。

然らば欲望の强さは何によつて測定し得られるかと云ふに、人は物を欲望する

事强ければ强いだけ、之を手に入れるために、自己の有する何物かを之に代へて與へようとするものである。故に或る物に對する欲望の强さは、之を得るために代償として與へようとする他の物の欲望の强さと比較し得られ、二者の割合を測り得られる。即ちある物の效用は其の物の代りに與へようとする他の物の效用と比較して同等なりとし又は二倍三倍なりとし得られる。若し一物が他の物の二つに代へて欲望せらるゝ時は前者の欲望滿足力は後者のそれの二倍であることを知る。

嘗てある富豪が大患を治癒したので、社會に對して其の感謝の意を表するため某市の大公園に、櫻樹數千本を寄附した事がある。傳ふる所によれば、彼が重患となるや心中に、若し此の病氣が癒えたならば自分の財產の半分を社會に寄附しようと誓つた、然るに病が薄らぐに從ひ、寄附しようと思ふ金額は次第に減じて來た。彼は考へた、若し此の分で進めば病氣全快の曉には、最初の誓は全く反故になるであらうと。それ故徨しく櫻樹僅に數千本を寄附したとの事である。彼が

病氣を癒し度いとの願望は彼が寄附しようとする金額の變動を以て知り得るのである。此の場合測り得たものは願望の強さであつて、願望其の物ではないことは勿論である。

斯くして我等は欲望の力を測定することにより、更に間接に其の欲望を滿たした時の心の滿足の程度を推測し得る。但し推測は飽くまで推測である。我等は武士は食はねど高楊子的の或種の滿足のある事を認める。之は欲望があるも、之を滿たさない事によつて得る滿足であつて、此の場合、假令欲望の力を測り得たとて、之を以て此の欲望を滿たした時の滿足の量を測り得たのではない。我等は又開けて悔しき玉手箱のあることを知る。此の場合は欲望の力の強いのに反し、之を滿たした時の滿足の量の少なかつた事を云ふものであつて、いづれも欲望の力を測定したとて之を以て滿足の量とするわけにゆかない。されど普通の場合に於ては、或財を欲望する其の欲望の強さと此の欲望を滿たした場合の滿足の量とは略同量であるとの假定の上に、科學的研究を爲すことは許さるべきものであると

思ふ。若し何等の假定をも許すべからずとせば、何の科學がよく成立し得るであらうか。

財の生產に要する努力及び犧牲量の測定も亦同樣である。即ち我等が財に對する欲望の強さ、又財による滿足の量を間接に測り得る如く、我等はこれを得るために忍ばむとする勞苦の如何なるものかを直接には測り得ないけれども、間接に之を推測し得られる。それは若し他に何物かを得る時は、此の勞苦を敢へてしようとする時、其の物を欲望する力即ち效用で以て努力及び犧牲の程度を間接に測定し得るのである。そして此の代償によつて忍ばうとする努力及び犧牲と、實際忍んだ努力及び犧牲とは同量であるとの假定をなし得る事は、欲望と其の滿足との場合と同樣である。

五

對價を拂つて得ようと欲する財の效用及び代償物を得て忍ばうとする努力犧牲

を測るべき此の對價、及び代償物が貨幣である時には、此の效用及び努力犧牲の量は之を數字を以て表示し得られる。例へば、或者が洋服一着を新調する爲には五十圓は拂つてもよいと思ふ時は、其の洋服に對する彼の欲望の强さは五十圓と云ひ得られる。之と同樣に、彼が一ケ月間の勤勞に對して百圓の俸給で甘んじようとする時は彼にとつては其の一ケ月の勞苦は百圓であると云ひ得る。之を以て效用及び勞苦の表示方法は品質的表示より進んで數量的表示となり一層正確になる。されど此の數量的表示は實際の欲望滿足及び努力犧牲を正しく表示するものとは限らない。例へば幼年者が或る工場又は商店に勤めたとする。此の場合彼が比較的多額の給料を得たとしても、尙之で彼が實質上支拂つたる努力及び犧牲を表示し得ない事がある。何となれば、若し彼が此の幼年時代を父母の膝下に在つて自由に其の心身を成長發達せしめたならば、或は後年社會に大なる貢獻を爲したかも知れない。然るに此の勤務のために之をなし得なかつたとしたならば彼自身としても、又社會全體として見ても提供した實質上の犧牲損失は到底僅少の給

金を以て償ひ得ぬからである。

此の事は努力犧牲の方面のみでなく欲望滿足量についても同樣である。例へば人は有益な書物を讀む時の心の滿足量は一時の肉感的快樂を滿たした滿足量に若かないことが多くある。されば此の肉感的滿足量は多大であつても之を以て其の者の物的生活の眞の福祉即ち富が多かつたとは云ひ得ない。富の研究はこゝまで到らなければならない。されど此の表示の齟齬あり、眞實の滿足及び犧牲と一致しない故に貨幣による數量的表示の方法の便利を棄てることは出來ない。

かやうに欲望の滿足量及び勞苦の量は之を間接に推測し得られ、更に之を貨幣金額を以て數字を以て表示し得られるを以て、第二の反對論たる主觀的にして客觀的觀察測定不可能なりとの非難は當を得ない。否、經濟學は此の數量的測定が可能のため、他の社會科學よりも遙に研究に便あり、其の發達は近年甚だ顯著である。

三、富の最大量

一

富とは人の物的生活の福祉であり、それは生活のため消費する經濟財の效用から非效用（卽ち生產費）を引去つた殘額の多寡を以て測量し得ることは前二節で稍詳細に之を說明した。此の事を承認するならば、富の增加は經濟財の總效用が增加するか、又は總生產費が減少することであると云はなければならない。然るに財の效用（欲望を滿たす力）は財の數量が增せば增すだけその總量を增し、又財の生產費は減少すればするだけそれだけ其の財の供給が容易となり、その財の生產量が增加する。それ故一見富の量と生產量とは同一であり、心的なる富と物の數量とは同じものの兩面のやうに思はれるが、兩者は決して同一ではない。富の增加は財の量の增加であるが、其の逆に、財の量の增加は必ずしも富の增加を來さないのである。

二

「物の眞價は金錢では測ることは出來ない」とは人々のよく云ふところである。又我等の欲望の滿足は必ずしも物の多少によらないことも多くの人々の知悉して居るところである。聖書に云ふ「人の生命は所有の豐なるに因らぬなり」（ルカ傳十二章十五節）と。これらの事は經濟學上物的生活の福祉卽ち富は財の數量と同一でないこと、其の價額は必ずしも人の欲望滿足量を表示しないことを云ふのである。

我等が貨幣を投じて物を買ふのは、自分にとつては其の物の價値が貨幣で測つた評價以上であるからである。今砂糖一斤を二十錢で買つたとする。然るに其の欲望の强さは假令一斤一圓しても尙買はうとする程であつたとせば、此の砂糖一斤の效用一圓から之を得るために支拂つた二十錢を差引き、結局八十錢の純富を得たわけである。富は八十錢、價格は二十錢である。之と同樣に急用あつて東京

から大阪に行かねばならない時には假令百圓を拂つてもよいと思ふ、然るに實際汽車賃として十圓を支拂ふのみで足りた場合には、節約し得た九十圓はその純富である。

三

以上は消費者の方面から其の純富を見たのであるが之と同樣なものは生産者にもある。卽ち勞働についても又資本についてもある。或人は勞働は苦痛と云ひ或人は勞働は快樂であると云ふ。二者何れも正しい。我等は毎日朝早くから終日單調極まる勞働に從事する事は決して快樂ではない。然し乍ら、若し我等が一年三百六十五日何等の勞働もしてはならないとしたならば如何、それこそ苦痛であつて、或程度の勞働は快樂である。それ故一年の中假りに一ケ月の勞働が快樂とせば殘りの十一ケ月間の勞働が苦痛であるわけである。

又一日の勞働に於ても、我等が朝勞働に着手する時は多少の精神的努力を要す

るが暫くすると仕事に馴れて之に興味を感ずるやうになる。然るに同一の勞働を繼續して居るうちに漸く疲勞倦怠を感じ初め、以後の勞働は次第に苦痛となり、勞働時間が長ければ長いだけ、苦痛を感ずる度合も亦强くなる。一日三四時間の勞働は喜悦である、六時間の勞働では多少の疲勞を覺え、八時間では相當の苦痛を感ずる。然るに十時間十二時間と勞働時間が延長されるに從ひ益々疲勞倦怠は加速度を以て增し來る。此の故に一日八時間勞働するとせば初めの三時間は之に效用があり殘りの五時間が勞苦である。然るに若し此の時第八時間目の賃銀の八倍に當る報償を得ば、其の者は實際の勞苦以上に其の代償を得たのであつて其の差額は純富である。

我等の貯蓄についても亦同樣である。貯蓄は現在得た金を使つて目前の欲望を滿足さす代りに之を將來のために犧牲とする事である。それ故、人は此の犧牲を忍ぶためには利息が得られるか、其の他何らかの對價を求めるのを常とする。然し乍ら貯蓄は悉く現在の欲望滿足の犧牲であるといふことは出來ない。人々はあ

る金額までは利息なくとも、否之に對して保管料を拂つても尚確實に之を保管して貰ひ度く思ふものもある。然るに確實な銀行が之を保管してくれるのみか、それに添へて利息をも拂つてくれるとしたならば、此の利息は彼にとつては純富である。

かやうに市場の價格は眞の富卽ち物的生活の福祉を表示しない。物の市價よりも物が實際我等に與へる欲望滿足量、自分の勞働に對して他から支拂はれる賃銀と其の勞働について自分が實際に感じる勞苦、資本蓄積により得られる利息と自分が實際忍ぶところの犧牲、此等はかやうに必ずしも一致しない。卽ち物的の眞の富は世間並の金錢價格と同一ではない。

四

それと同じく富、卽ち物的生活の眞の福祉は物の量とも必ずしも一致しない。それは富とは物の效用から非效用（生産費）を引去つた殘額であるが、此の效用

及び生産費は物の數量の多い寡いによつて常に其の割合が變動するからである。

先づ效用の方から説明すれば、人の欲望は多種多樣で殆ど盡きず、全體としては人の欲望には際限がなく、隴を得ては蜀を望み、又カーライルが云つたやうに「靴磨に宇宙の半分をやれば殘りの半分もほしくなる」。然しながら個々の欲望はある量を以てもう之で澤山だと感じさせられるものである。例へば餓死する程食を求めて居た者も、數椀の飯を以て其の胃の腑は一杯になり、もう之れ以上は欲しくなくなる。此の場合最初の一椀は彼にとつては他の何物にも代へられない程の效用（欲望滿足力）があつた。然るに第二椀第三椀と代へるうち彼の食に對する欲望は次第に弱くなり、遂にある時が來るまでは食に對する欲望は無くなる。之を食の方面から云へば其の效用は次第に減少し遂に無となつたのである。

之は人間の天性であつて何人も經驗するところの事實である。勿論反對の場合はある。例へば金持と灰吹とはたまればたまる程穢なくなるとの世諺のやうに、金持になればなる程益々金をほしがる者が少くない。然し乍ら、之は他に別の事

情が發生した爲であつて前に述べた天性が此の人には存在しないためでは無い。別の事情とは其の人が金持になるに從ひ、其の性格が次第に變化し、其の日暮をして居た時とは別の世界に住むやうになつた事を云ふのである。若しかう云ふ事情が生じなかつたならば、物を多く所持すればする程、其の一つ一つに對する尊重の念は次第に減ずる、即ち其の物の總效用は其の數量の增加に從うて增しても一つ一つの效用は次第に減少するのである。之を**限界效用漸減の法則**と云ふ。

限界效用とは財が二個三個四個と順次人の欲望を滿たす時其の最終の財が人の欲望を滿たす力を云ふのである。限界效用漸減の法則とは、例へば林檎が一個より二個ある時の方が、我等の欲望を滿足さす總量は多いが一個の場合の二倍にはならない。第二個目の欲望滿足力即ち限界效用は第一個のそれよりも減少して居る。若し林檎が三個あらば、第三個目の效用は更に減少する事を云ふのである。

こゝに注意し度いことは限界とは必ずしも時について最後に來た財を云ふのではい。例へば林檎が五個あつたとする。しかも此の五個の品質が同一でなく、或

物は美味であり、他の物は餘り甘くないとする。その時は甘いものから始つて次第に甘くない物が五個の中の限界となるのである。ある工場で勞働者が千人居たとして其の能率がそれぞれ違ふ場合にも、限界をなす勞働者は必ずしも最後に雇はれた者を云はない。質の良いものから始つて質の悪い者がその限界をなすのである。

されば財の數量が多ければ多いだけ人の欲望を滿たす總量は增加するには相違ないが、その增加の割合は財の數量の增加の割合より少なく、遂には今一個を增したとて最早欲望滿足を感じないやうになる。空氣の如きはそのよい例である。されば或程度以上に財を生產するときは、假令その生產費は各個同一であるとしても限界效用は漸減し生產費以下になるであらう。

他方生產費も亦財の生產量の多寡と無關係ではない。生產量を增加しようとせば、種々の困難に打ち克たねばならないため限界生產費は限界效用と反對に漸次增加するを常とする。例へば今までの十時間勞働を十二時間に延長せねばならな

い。さうすれば前に述べたやうに、この二時間の勞働延長のため忍ばねばならない勞苦は決して今までの勞働二時間の勞苦と同量ではなく、遙にそれ以上である。從つて今までの二時間分だけの賃銀以上の增拂を要し、賃銀總額を增すばかりでなく、其の割合をも增すのである、限界生產費はかやうに漸增する。又一反歩米二石の從來の收穫を急に四石に增さうとする時は、後の二石に要する勞力資本は從來要した費用以上を要する。

それ故、急に生產量を增加しようとせば生產費總額が增加することは勿論、其の增加の割合も亦次第に大きくなり、財の限界生產費は次第に上昇する。茲に限界生產費とは限界效用と同じやうに、例へば毎日靴一足を作る者が二足を作るやうにならばその二足目、三足を作らば三足目、毎日千足を作る工場で二千足作らば最後の千足を生產するため增加した生產費を云ふのである。

大量に生產せば生產費は反つて減少することは人の知るところである。されど假令大工場でも急に大量の注文を受けた時には其の生產費は上昇する。それ故他

に特別の事情の變化がない限り（此の事は後詳しく說く）、限界生產費は次第に漸增するのを常とする。之を**限界生產費漸增の法則**と云ふ。

五

財の生產量が增加すればする程、一方に欲望滿足の總量は增すであらうが、其の增加の割合は次第に減少し、甚しきに至つては皆無となり、又はマイナスとなる。然るに他方には財の生產量を增加すればする程他に特別の事情がない限り、生產總費が增すばかりでなく、其の增加の割合は次第に大となる。茲に於て富即ち財の效用から生產費を引去つた殘額は生產量が多ければ多いだけ總額は最初は次第に增加するも其の增加の割合は次第に減少し、財の數量が或量に達した以後は限界生產費の方は益々上昇し、限界效用は益々下降し、遂に其の差額はマイナスとなる。此の程度以上の生產は多ければ多いだけ原則として富を減少さすのである。

今米の例を以て之を説明せば、各人が毎日平均一合しか米を得られない時には人々は之を得るためには十錢以上を拂つても差支ないと思ふであらう。今それを十二錢と假定する。然るにその生産費は僅か五厘で足りたとせば、各人毎日の純富は十一錢五厘である。若し各人が毎日平均二合を消費するやうになつたとする。此の場合人々は前と同樣一合に付き十二錢、二合で二十四錢を拂はうとは思はない。其の額は幾分減じ二合に對して十八錢位となつたと假定せば、第一合を十二錢として殘りの六錢が第二合の效用である。即ちその限界效用は十二錢から六錢に減じたのである。然るに此の二合の生産に一錢三厘を要したとせば其の限界生産費は前の一合の五厘から八厘に上昇したのである。そして二合を消費して得た總富は總效用十八錢から總生産費一錢三厘を控除した十六錢七厘となる。

かやうに米の生産量が增せば增す程總效用から總生産費を控除した殘額は或る程度までは增加するが、やがて減少する。其の增加の頂點、即ちこれ以上は增加せず、反つて減少しようとする點は限界效用と限界生産費とが均しくなり、其の

差引殘額皆無となつた時である。今之を表で説明せば次の如し。

一人毎日平均消費量	總效用	限界效用	總生産費	限界生産費	純富即ち總效用より總生産費控除額
一合	一二、〇錢	一二、〇錢	、五錢	、五錢	一一、五錢
二合	一八、〇	六、〇	一、三	、八	一六、七
三合	二〇、〇	◎二、〇	三、三	◎二、〇	一六、七
四合	二〇、五	、五	九、三	六、〇	一一、二
五合	二〇、六	、一	三三、三	二四、〇	▲一二、七

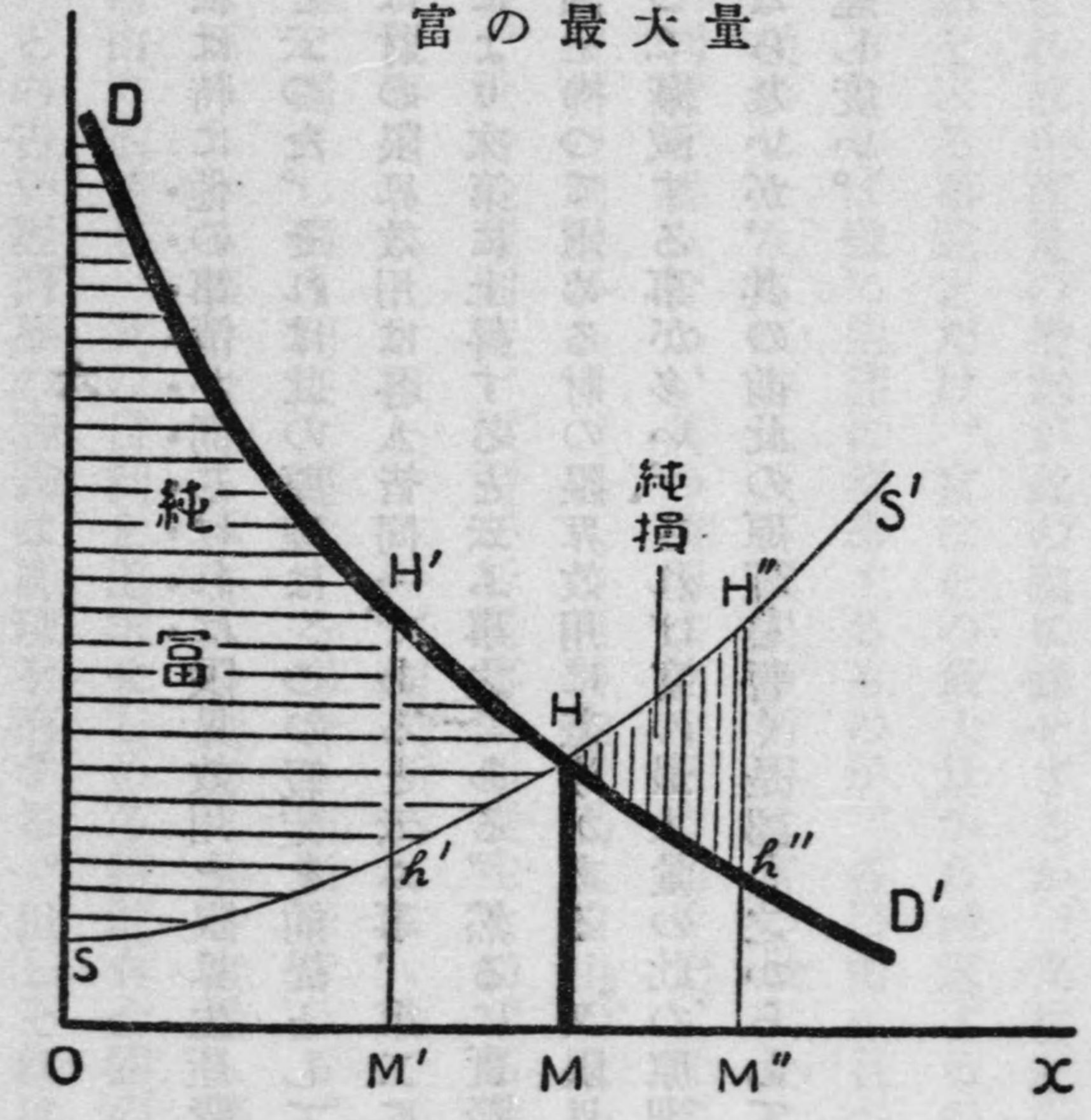
右表のやうに、其の財の限界效用は次第に減少し、他方限界生産費は次第に上昇し、此の二者が遂に均等するに至つた其の時の財の量が富の最大量を表すのである。ここまで財の數量を增加することは富を增す所以である。これ以上數量を增加する事は反つて富を減退せしめる事となる。**他の事情が同じければ**、限界效

用と限界生産費との均等點に於ける財の數量が富の最大量を表示するのである。それ故生産量の増加が此の點に達せざるか、又は此の點を超過するか、共に此の點を去る事遠きだけ、富はその最大量から減退するのである。若し此の事を承認するならば總て生産に從事するものが、各自由に且つ有能に、此の限度まで生産に從事したならば各人及び國民の所得は富の最大量を示すものと云ひ得る。各人が判斷を誤らむか、其の所得は此の點に達せず、又は此の點を超過する。又社會に種々の制限があり、各人の經濟的行動に自由のない時も之と同樣の結果を生ずる。社會の諸制度、慣習が新規事業の發生を妨げる時、又各人が最も適する職業に從事することを阻止する時、國民所得はこゝまで來らない。又一個の事業が産業を獨占し獨占利益を壟斷する場合も亦同樣である。自由は富を此の最大量にまで至らしむる條件である。「各人の利益は其の者最も善く之を知る、されば各人の自由に放任し、其の自利を追求せしめる時社會全體の最大繁榮を來すものである」との古い經濟學の理論は眞理を有する。但しそれは半面の眞理である。

六

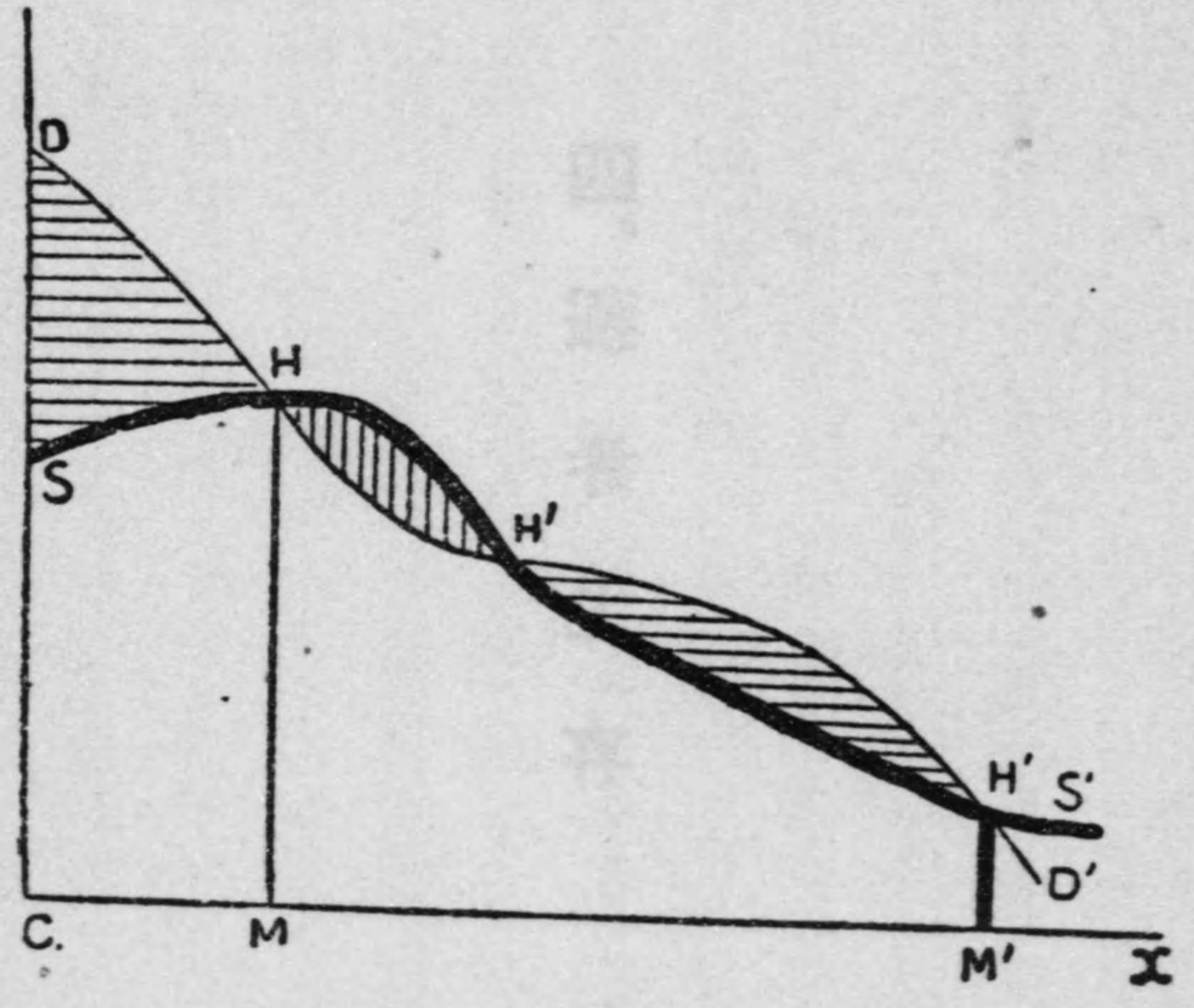
私は特に**他の事情が同じければ**限界效用と限界生産費均等點が富の最大量を示すと云つた。それは此の原理は二つの假定を前提として居るからである。その第一は財の限界效用は各人皆同一であると云ふ事、第二に限界生産費は生産量の増加により次第に上昇すると云ふ事之である。然るに實際には各人貧富の懸隔あり一圓を拂つて求める財の限界效用に差違がある。又限界生産費は大量生産により反つて漸減する事が多い。されば富の最大量の此の原理はやがて補正をしなければならないが、其の前此の原理を暫く是認し之からして更に重要な一つの理論に到達し度い。

富の最大量



O→x 生產量の增加
D→D′ 限界效用の漸減
S→S 限界生產費の漸增
HM 兩者均等
OM 其の時の生產量
DHS＝ DHMO(總效用)—SHMO(總生產費)卽ち富の最大量
OM′＜OM 此の時の富は最大量より H′Hh′ だけ少
OM″＞OM 此の時の富は HH″h″ だけ少

大量生產による限界生產費漸減の場合



O→x 生產量の增加
D→D′ 限界效用の漸減
S→S′ 限界生產費の漸減
HM 兩者最初の均等
DHS 此の際の富(最初の最大量)
H″M′ 再び限界效用及限界生產費の均等
DHS—HH′＋H′H″ 此の際の富
若し HH′＜HH″ ならば一時 HH′ の損失を忍ぶも結局其の差額だけ最初の富の最大量よりも大

四、適者生存

前節に於て、若し各人が其の欲する所に從つて自由に經濟的活動を爲し、各々其の生產物の限界效用が限界生產費と相等しくなるところまで生產し、相等しきに至つて之を中止する時、其の富、卽ち物的福祉は最大となるといふ理を說いた。

今此の理論を實際社會にあてはめ、更に之を進展せしめて行き度い。こゝに月收百圓で生活する一家があるとする。此の百圓は此の家の主人が社會に提供した一ケ月間の勤勞の報酬である。彼は此の百圓を以て彼の欲望を滿すのである。彼が若し此の百圓が與へる欲望の滿足量では不足だと考へた時は、もつと稼いで其の收入を增さうとするであらう。然も彼がその勞苦を敢へてしないのは、そのために要する勞苦は遙に大であつて之をなしてまで收入增加を計るのに價しないからである。

彼は此の勤勞の代價である百圓を以て一家の欲望滿足の資に當てる。之がため

百圓の內二割を家賃に、五割を食費に、殘りの三割を衣服其の他の費用及び貯金に割當てたとする。彼は此の割當を以て最もよく百圓を使用したと考へるに違ひない。何となれば、若し彼の住に對する欲望が强く、食に對する欲望が弱かつたならば、彼は食費から之に投ずる數圓を節して之を家賃に增し加へ、今少しよき家に住むであらう。此の方が此の數圓を有效に使用し得て全體として滿足量が多いわけである。然るに彼が之をしないのは彼が家賃として拂ふ二十圓の最後の一圓と、食費として拂ふ五十圓の最後の一圓とが同量の滿足を與へ、一方を減じ他方に加へても何等の差違がないからである。それ故に各費途に拂ふ最後の一圓の滿足量が何れも均等量である時、總體に最大の滿足がある。之を**限界效用均等の法則**と云ふ。

此の理は廣く社會全體に亘つて之を觀察しても矢張り同樣である。ここに我國の一ケ年の總所得が假に百億圓あつたとする。之はその國民が其の年に生產した財の總量であり、又其の年の欲望を滿たす爲に其の年に於て使用し得る財の總量であ

る。若し我國民が今少し多くの欲望を滿足せしめ度いと欲するならば、今少し多くの財を生産したであらう。かくなさないのは前記同樣に、主として、其のために拂ふ努力及犧牲がうんと多くなり、之を投じて得る欲望滿足量に副はないと考へたからである。所得高を百億圓に止めたのは、百億圓目に到つてその一圓又は一萬圓の限界效用がそれだけ生産するに要する限界生産費とこゝで一致したからである。こゝまでは限界效用の方が限界生産費を超過して來た。これ以上は不足することゝなる。

國民は此の百億圓を以て衣に食に住に或は其の他の費途に當て、又一部分を以て將來の準備に當てる。(それで工場が出來、鐵道が出來、各種の資本が生ずる。)この場合前に述べた一家の家計と同樣に、その各用途に於ける最後の圓は何れの用途に使用するも、欲望滿足上何等變化なき點に至るまで、之を取捨し割當てるのである。(勿論此の場合最後の圓とは一圓や二圓を云ふのではない。)

さらば國民が住居のために費す金額はそれだけ費すことが最もその勞苦の割に

效果があり、又食費に費す金額も亦同樣である。若し住居に費す金額が過少であつて衣のために費す金額が過大であると考へた時には、換言せば前者の欲望が後者の欲望よりも大なる時は、衣のために費す金額を減少し、之を住居費に增加するであらう。そして結局各費途に費す金額が(そして勞苦が)其の何れに費しても之によつて受ける滿足量に差違がないところに至つて止むであらう。こゝに各費途の限界效用は平均し、又悉く其の限界生産費と均しくなる。そして富は最大量となる。

若し一方の費途の限界效用が他の費途の限界效用よりも大であつたならば、此の方へ他方の費途にあつべき金額は振り向けられ、又若し各費途の限界效用が限界生産費以上であるとせば、兩者が均等するところまでもつと生産量を增すであらう。此の點に落着く迄は各財の間に取捨選擇が行はれ、其の欲望を滿たす事多いものが欲望を滿たす力の少ないものに代つて多く生産使用せられるのである。

以上私は個人に於ても又社會に於ても富の最大量を得ようとして人々が自由に

且つ合理的に經濟活動をする時は各費途の財の限界效用及び限界生產費が悉く等しくなるまで生產消費され、各財の間に取捨選擇が行はれると云ふ事を述べた。此の事は同一の費途內に在つても亦行はれるのである。例へば住居について云へば、洋館と在來の日本式家屋との間に、若し洋館の需要價格が其の供給價格よりも大である時は、次第に日本家屋の代りに洋館が多く造られ、甲請負師の請負價格が低く、其の造る家は乙請負師のそれに優るならば、甲請負師は次第に乙請負師に代つて用ひられる。從つて從來日本家屋の爲めに支拂つた金額は次第に洋式家屋に支拂はれ、從來甲請負師に拂はれた金額は乙請負師に支拂はれ、結局兩式の家屋、兩請負師の何れに對して支拂ふも、その欲望滿足の點から見て、大差ないところまで此の變動は續き、兩者の限界效用が均しくなつたところに來つて始めて取捨選擇運動は止むのである。此の取捨選擇によつて最も欲望を滿たし得る家屋、又建築請負師が多く用ひられ、さうでないものが捨てられることになる。

二

此の原理は消費の方面のみならず生產の方面にも亦同じやうに行はれる。今此の建築請負師の事業內部について云へば、請負師の供給量には一定の限度がある。自由競爭の社會制度の下に在つては此の限度までは供給するがこれ以上は供給をしない。限度とは需要者の限界效用卽ちその商品に對して需要者が支拂はうと欲する價格が供給增加に伴ひ次第に低下し、遂に限界生產費卽ち此の商品に對して供給者が要望する價格と相等しい金額となる點がそれである。

此の場合若し一方の費途の限界效用が他の費途の限界效用よりも大であつたならば、此の方へ他方の費途に充つべき金額は振り向けられ、又若し各費途の限界效用が限界生產費以上であるとせば、兩者が均等するところまでもつと生產量を增すであらう。此の點に落着くまでは各財の間に取捨選擇が行はれ、其の欲望を滿たすこと多いものが欲望を滿たす力の少ないものに代つて多く生產使用せられ

るのである。

三

以上私は個人に於ても又社會に於ても富の最大量を得ようとして人々が自由に且つ合理的に經濟活動をする時は消費の方面に於ても又生産事業の內部に於ても其の各費途間の財の限界效用及び限界生産費が悉く等しくなるまで生産消費され各財の間に取捨選擇が行はれると云ふ事を述べた。更に夫は同一の費途內に在つても亦行はれるのである。例へば前にも云つたやうに、甲請負師の請負價格が低く、其の造る家は乙請負師のそれに優るならば、甲請負師は次第に乙請負師に代つて用ひられる。從つて均しくなる點までは生産し供給することを云ふのである。

普通實業家又は企業家と云はれる此の供給者（前の例をとれば建築請負師）は社會一般の需要に應じて建築工業を爲すに當り、種々の生産要素を集めなければならない。建築用材・器械・建物・敷地・大工その他の勞働者の勞働、事務員の

事務、若し事業主體が大建築會社であるならば、此の事務を支配する支配人の才能等、そして此等各種の生産要素に對し其の對價を支拂はなければならない。又自己の資本及び事業經營に對して相當の報酬を得なければならない。若し假りに原料に總支出の三割を、賃金に五割を、その他に二割を支拂つたと假定する。此等の費用は彼が需要者より受取るべき建築の代價から支拂ふものであつて、それを控除した殘額を彼の資本、及び事業經營に對する報酬として自ら收受するのである。

彼が事業經營に敏腕を有するものであればあるだけ、此の費用の各科目に對して常に深甚の注意を拂ひ、能率の大なるもの卽ち生産費の小なるものあらば之を使用し、能率の上がらないものと取り替へる。若し器械の能率が大であつて勞働者を使用するよりも、生産費を節約し得られると見れば、勞働者の數を減じて器械の數を増し、其の器械の中でも新に精巧な器械が發明されたならば、之を購入して舊い器械と代へる。又勞働者の中でも、熟練な職工を多數使用する方が不熟

練勞働者よりも有利だと見れば、其の有利とする所まで之を取り替へる。若し專門學校を卒業したもの丶方が結局能率が多くて有利だと見れば其の採用を增し、能率に應じて次第に登用し、もつと多くの俸給を支拂ふ。

此の取捨選擇は、どこまで行はれるかと云ふに、各自の提供する能率に對して支拂つてもよいと思ふ價格が先方から代償として要望する金額と均等する所まで行はれるのである。即ち其の能率に對する企業家の限界效用と生產要素提供者の限界生產費とが均等點に達するところまで行はれるのである。それ故最も能率が高く然もその要望する代償の低い者が一番先に使用せられ、能率が低く然も其の要望する代償の比較的高いものは使用を減ぜられ、次第に社會から其の供給を絕つに至るのである。但し實際社會で使用人がその所を得るには只單に其の能率によるとは限らない。他に種々な因緣がある、使用者の愛顧は其の一つである。兎に角效用の多く又生產費の少ない者が採用せられるのである。

かやうに事業家の事業內部に於て限界效用と限界生產費とが均等するところま

で、そして又各費途の限界效用と限界生產費とが相互に均等するところまで取捨選擇が行はれるやうに、社會自體も亦同樣の原理で事業家を取捨選擇して居るのである。社會は生產者の供給する商品に對して社會の需要の限度に於て之に支拂ふものである。故に若し社會から支拂を受ける金額が供給に要した總生產費を控除して尙多額の利潤を生ずる場合には、事業家は更に生產を增加し、又此の事業が有利と見て新に事業を開始する者も出て來る。それ故其の供給量は頓に增加しそのためその限界效用は漸減し社會が之に對して支拂はんとする需要價格は降下する。それ故事業家は多額の利潤を得られなくなり、自己の事業經營の勞苦、提供資本に對する市場の利子、企業危險に對する相等の保險料等、事業經營上の最低限度の報酬を得る程度に下降する。利潤がこれ以下になる時は、事業は縮少され或者は廢業し、供給量は減じ、從つて限界效用は高まり社會の需要價格は上昇し、結局限界效用と限界生產費と均等するところまで引上げられ、そこに落付く傾向が生ずる。

若し此の事業家中特に能率を發揮しその生産費を低下して供給するものがあれば、社會は此の者の供給を多く受け、能率の擧らない生産者に支拂つて居た金額を此の者の商品に支拂ふやうになり、此の者の事業を發展せしめる、社會は宛も生産者がその生産の各要素に對して、能率の多いものを採用し、能率の擧らないものを淘汰すると同樣に、事業家をその能率に應じて淘汰しつゝある。かくて優秀なものは其の所を得、無能な者は遂に其の所を失ふ。されど他方、宛も實業家が自己の使用人中或者に對しては其の能率によらず、自己の特別の因縁により恩顧を與へ、之に其の所を得せしめるやうに、社會一般の需要者も亦其の特別の需要に應じ得る位置にある實業家に特別の庇護を與へ、其事業の能率によらずして榮えしめることがある。例へば政府が社會的に有益な事業で將來發達の可能性充分あるものに補助金を與へて之を奬勵し、又勞働者を保護し、貧窮者を救助する如きも之に類する。其の他社會的に意味のない只流行の變遷により、社會の劣惡趣味に投じ得た實業家などもそれである。此等の者はその時の自己の能率によらず、又は眞に社會的なる貢獻のないのに係はらず、社會が恩惠を與へる限度まで生存するのである。

四

こゝに到つて、人類の物的生活には富の最大量の原理の上に又之と相關連して一般生物界に行はれる進化の法則、スペンサーの所謂適者生存の法則が依然として自ら行はれつゝあることを認める。生物は其の境遇に最も適應するものが生存する。その如く經濟社會に於ても此の境遇を最も有利に利用し之に最もよく適應するものが生存し繁榮する。そして境遇に最も適する者とは效用の大なるもの、そして生産費の小なるもの卽ち能率あるものである。此の二者は道德的には必ずしも一致しない。例へば頽廢的效用の大なるものは動もすれば眞面目な欲望を滿たす者よりも適者として生存し易い。

各人が最も愼重に最少の犧牲を以て最大の效果を擧げようとして其の判斷を誤

らないならば、社會一般の需要も最もよく滿たすもの(效用多きもの)が採られ、その需要を滿たすこと少いものは捨てられる。それは他方最も能率あるもの（非效用の小なるもの）が採られ、能率の少ないものが捨てられることである。此の取捨選擇が自然に行はれて社會の富は最大に達するのである。勿論前に述べたやうに富についての道德的價値判斷は別である。此の取捨選擇の傾向を**代用の法則**といふ。此の法則が現在の經濟組織に於て行はれて居るのである。ダグラス・ステウアート氏の次の興味ある言も亦此の法則の遂行と見られる。

「嘗て產業革命が法律に由らず、又議會の協贊を經た補助金に由らずして自然に發生したやうに、此の產業革命に相對抗する新なる革命も亦立法に由らず、軍隊に由ることなくして之を起し得る。我等が現在よりも少なき量で且つ現在よりも品質の善きものを購はんとする時、之に對する凡ての供給機關及び之に伴ふ社會その者の構造を一變し、此の需要に適するものとなさしめる事が出來る。」

嘗て生產方法の變革からして生じた產業革命に對し、此の度は消費者が其の欲望を向上せしめ、量よりも質を貴ぶ消費方法の變化からして、生產者に對する取捨選擇が新に行はれ、社會全體の生產組織に變動を生ぜしめるところの新な產業革命を起し得ると云ふのである。かくあらしめ得るのは前に述べた富の最大量の原理と此の原理に基づく代用の法則、卽ち適者生存の理に外ならない。スマート氏は其の著所得分配論で、此の代用の法則は社會組織が一變して社會主義的經濟組織の世となつても、矢張りその社會で行はれるであらうと云つて居る。

五、富の増進

私は第一節及び第二節で富とは物的生活の福祉であり、之は財の效用から之を生產するに要した生產費を控除した殘額を以て測定し得ると云ふ事を述べ、第三節に至つて富の增加は必ずしも財の數量の增加と一致しない。富は財の數量の增加に從ひ或程度までは增加するが、其の程度以上は反つて減少する。富が最大量となる點は財の限界效用と限界生產費、即ち今一單位財の量を增すことにより、それが欲望を滿たす量とその爲に要する生產費とが均等となる點であることを述べた。そして第四節に至つて人々は皆富の最大量を得ようとして各自己の利益とするところを自由に追求する時其の間代用の法則が行はれ、財及び其の生產の各要素中最も效用の多いもの而して最も生產費少ないものが取捨選擇の結果適者として生存し、社會の富は次第に增進することを說き、この適者生存、社會の富の增進の理である代用の法則は第三節の富の最大量の原理と相關連し、又之を基礎とすることを述べた。

然るに此の富の最大量の原理は第三節の末尾に一言斷つて置いたやうに二つの

假定の上に立つて居るのである。即ち

一、更に今一單位だけ多く財を欲望する各人の限界效用は全く相等しいこと。

二、財は生產量の增加に從ひ其の限界生產費は次第に增加すること。

されば此の假定が、若し正しくなかつたならば、富の最大量の原理はそれだけ修正を要すること勿論である。本節は專ら之に關連して富の增進を說かうとする。

最大量の富は財の限界效用と限界生產費とが均等した時に於ける生產量の總效用から總生產費を控除した殘額であることは前述の通りである。それ故若し社會の特定量の限界效用の低下を防ぎ、他方限界生產費漸增の傾向を覆し、以て財の總效用を增し限界生產費を次第に減少せしめば富は更に增加することゝなる。されば如何にして之をなし得られるであらうか。

(一) 效用の增加

一

財の效用は效用漸減の法則により財の數量の增加に伴ひ次第に其の割合を減少する。故に富者の有する一圓の限界效用は貧者のそれよりも遙に少なく、富者が更に其の所得を增加することによつて得る欲望滿足量は、同一の額を貧者に分配することによつて得る貧者の欲望滿足量より遙に少ないと云はねばならない。されば富者の所得が幾分減じても、之を貧者の所得に加へ得ば、卽ち所得の分配が平等に近づき得ば、その社會の所得總量は同一であつても、其の效用は增加し、從つて富は增加する。

然るに若し社會全體の所得總額は益々增加しても、それと同時に社會の貧富の懸隔がそれよりも尙大きくならば財の效用はそれ程增加せず、其の財の生產費の方は增加するため社會の富は反つて減退する。貧者にとつては一圓の限界效用は甚だ大である。それ故之を得るため身神の疲勞を顧みず長時間働いて健康を損じ精神を弱め、家庭を暗くし、此の一圓のために支拂ふ努力犧牲の量は甚だ大であるからである。カーライルが其の著「過去及現在」の劈頭に「英國は富充溢し、

各種の產物に滿ち、人の種々なる欲望を滿足せしめるに充分である。然も英國は營養不足のために餓死しつゝある」と云つたのは此の理である。

此の故に若し需要者が富者であり、供給者が貧者である場合には其の供給量を制限し、それに對する需要價格を高めることによつて社會の富は反つて增加するのである。例へば十二時間以上勞働して一圓の賃銀しか得られない場合に、若し彼等が八時間以上勞働しないことにして、勞働の供給を制限して以て其の賃銀の騰貴を來さしめ、以前同樣一圓又はそれ以上の賃銀を得ば、勞働者は心身の疲勞を避け得られ、且つ其の修養の餘暇を得て社會全體の富を增すのである。

反對に若し供給者が富者であり、需要者が貧者である場合には、供給者が限界效用卽ち需要價格と限界生產費卽ち供給價格と均等する點以上に生產せば、其の市價下落のため生產費以下となり、供給者には損失を與へるも、多數の需要者は安價に財を獲得し得る。其の欲望滿足量は富者たる供給者の損失以上であり、富は最大量の原理以上に增すのである。最近行はれる操業短縮の如きは、此の理か

らして社會の富を減退せしめ、彼等自身が受ける利益を以て之を償ふことは出來ない。

貧富の懸隔が益々甚しくならうとする現在の經濟社會に於ては、前に述べた富の最大量の原理卽ち財の數量を限界效用と限界生產費との均衡する所まで生產しそれ以上又はそれ以下の生產をしない時最大の富が得られるとの理論はここに一大修正を必要とする。其の方法如何は別として、原則としては分配を平等に近づけることによつて富は其の最大量の原理以上に增加するのである。

此の事は又現在の人心を以てせば社會融和の道でもある。何となれば人はある程度迄は生活必要品の絕對量を求めるが、それ以上は他人と比較して他人同樣またはそれよりも多くを得ようとするのである。自分の現在の所得が少いことよりも、他人が自分より多く所有することが不快なのである。彼等は自分を他人の狀態にまで引上げ得られねば、他人を自分の位置にまで引下げて平等を欲する者である。カーバーが社會正義を論じて「我等は安樂に暮さんとするよりも、隣人と

同じやうに暮さんとして支出する方が多い」と云つて居るのは此の心理である。

それ故若し各人の財に對する欲求が全然同一と假定せば所得は全然平等に分配せられる時、社會的最大の滿足量を得られる。然るに各人が物に對する欲求の强さ、又欲求する物の種類は決して同一ではない、老人の欲望と幼兒のそれとは異なり、學者と車夫とも異なる。又或者は所得多く然も物に對する欲求の淡いものがある。我等は往々大實業家のうち、身には粗服を纏ひ粗食に甘ずる者を見る。然るに他方所得少く又は皆無にして然も物に對する欲求の甚大なるものがある。身は病床に臥し働く事が出來ない場合の如きは之である。それ故所得を平等に分配せず、各人の必要に應じて分配せられることを得たならば、その物的社會的生活は理想的である。財の效用の方面より見て富は此の時眞實の意味で其の最大量に達する。

二

之は營利を主眼とする現在の經濟社會では各人の自由に放任しては達し得られない。それ故不平等の分配による社會一般の欲望滿足量の減退を防ぐためには國家の權力によつて各人の營利の自由を或程度まで規律せねばならない。今まで各人の自利追求の自由が富は增す所以であると述べた。此の說はこゝに一つの補足を必要とするに至つた。

然らば我等は現社會組織を變革し、人々の自由に制限を附し、營利を許さない社會制度とせば、上記の理想は利達可能であるかと云ふに決してさうでない。何となれば、人の性質が變改しない限り、其の上に建てられた制度は活用しないからである。勿論人は一面境遇の子であつて、境遇をよくすることにより又社會制度が革れば、人の心も變り得るであらう。然し乍ら、人は全然境遇に左右せられるものでない。善良なる家庭から不良少年が顯れ、不良の家庭から偉人が顯れる例もまた乏しくない。ベトフエンの父は常習的大酒家でその母は肺病で死んだ。又假令境遇の變化により人の心は改まり、人類は進歩し其の活動力を增すとして

も、境遇の變化の好影響は急激には生じない。否、急激なる境遇の變化は害を與へることが多い。されば一代で巨富を築いた者の子孫よりも二代三代で下層から上層に達した者の方が健實である（秀吉と家康）。社會組織の改革は漸進的なるを要する。

加之今云ふ通り制度の改革による此の理想的生活の現出の方法には餘り多くの效果を期待することは困難である。されば現今如何なる社會改革論者も、その分配制度を各人の必要に應じて消費せしめると云ふ理想的原則の上に置かうとするものは一人もない。タウシグが其の經濟原理で言ふやうに、その分配方法は各自の勞働に對し現今行はれて居る能率主義に今少し多く平等主義を加味するに過ぎない。

然るに我等は現在の社會組織の內に稍此の理想に近いものを發見する。それは家族である。家族の內には他の社會生活と別の原理が支配してゐる。こゝには家族的愛が中心であつて、營利が存在しない。各自の行動の動機は與へようとする

ことであつて、報酬を受けようとすることではない。自由であり、然も愛他である。若しも此の愛他的精神が家族の範圍から外に擴張されて、人類的家族となるならば、其の經濟的活動の面目は一新するに至るであらう。家族の此の例は、直接人心其の者の改革は、制度の改革に勝ることを我等に示すものである。

三

如何なる社會制度に於ても、その富は所得が平等に近づくに從ひ、假令富者の損失となつても尙富は增す、社會が全然營利を目的とせず、愛他的となつた時には效用の方面から見て富は眞に最大量となる。それ故此の方面に進めば進む程富は益々增進するのである。されば前に述べたやうに現代營利を主眼とする經濟社會に於ては國家が之に統制を加へ、殊に公共的性質を帶びた事業例へば水道・瓦斯・電氣・鐵道等については嚴に、供給量を制限して獨占的價値を得ようとする者を取締り、一定の供給量を指定し、又一定の價格を强制する方が、供給者の自

由に放任するよりも反つて富を增す所以である。

然し乍ら現代の營利社會に於ても、事業家が利己的動機より自發的に事業將來の發達を考慮して、社會的利益を計ることも少くない。例へば、大都市郊外の電車經營は事業開始當初は乘客僅少であつて損失を免れないが、それを忍んで軌道を敷設し又乘車賃を低率にするのはそれである。かくする事によつて多數の郊外住居者を沿線に引つけ、沿線地帶を發達せしめるばかりでなく、結局乘客を增して事業家自身を利すること、當初から損失を避けて高率の乘車賃とするよりも遙に大である。

加之現今大事業家は全然利己的動機のみで事業を經營しない、彼等は勿論利己的であるが、公共的精神も亦多かれ少かれ混入して居るのである。今後若し此の精神が益々發達する時は社會の富は益々增進する事となるのである。之について更に富の增進の他の原因である生産費の減少について述べるであらう。

四

各人の所得が平等に近づく時社會の富は一段と増進すること前に述べた通りであるが、若しそのために生産能力のない者を多數に養ひ、其の子孫を繁殖せしめるやうにならば、反つて次に述べる所の生産費の方面で悪結果を來し、社會の富を減退せしめる事となるであらう。貧富の懸隔の緩和が只貧者の生計程度の上昇即ち生計の増加だけに止まり、之に伴つて全生活程度の増進、從つて彼等の生産上の能力も亦發達しなかつたならば、人類の進歩は反つて阻止せられざるを得ない。然るに嘗て賃銀の鐵則と云はれ、そのため經濟學自身が陰慘哲學と云はれるに至つたところの、貧者が所得を増せば生計安易のため子を多く産み、再び元の貧乏に歸り、貧者は永久に貧乏から脫することは出來ないとの理論は事實と相反し、實際は貧者階級の所得が増加せば、其の階級の能率を増加せしめ、能率の増進は更に其の所得を増加せしめ、次第に其の生活を向上せしめ得る原因である。

彼等は今迄陋屋に住み、不潔の衣服を纏ひ、營養不足の食物を攝取して居たのが、所得の増加の結果今少しく多くの生活必要品を攝つてその肉體及び精神の健全を計り得、又一家の主婦は從來內職に追はれて家事の整頓を爲す暇がなく、子女の敎養に力を盡し得なかつたのが之を爲し得て、その生計程度の増加は次第に貧者階級の全生活程度を向上せしめることを常とする。それ故假令富者階級の所得に制限を與へても貧者階級の所得を増し、以て貧富の懸隔を漸次除去せしめることは、啻に財の效用を増加して社會の富を増進せしめるばかりで無く、他方生産能率の上昇、從つて生産費の減少を來し此の方面からしても亦富を増進せしめるものである。

（二）生産費の減少

一

前項で若し社會に貧富の懸隔が大である場合には、財の限界效用と限界生産費

とが均等する點で生産を中止せず、寧ろ若し富者が供給者で貧者が需要者であらばその點以上に生産量を增して其の價格を下落せしめ、又貧者が供給者で富者が需要者であらば反對に供給を制限して均衡點までに到らしめず、以て供給する價格を上昇せしめる方が富の量は反つて多い事を述べた。之は富者と貧者との間に財の限界效用、卽ち今一個を得る事によつて增し得る欲望滿足量に著しい差があるためであつて、此の懸隔をなるべく平等に近づけるだけ、所謂富の最大量の原理に拘らず、反つて總效用がそれ以上に增加するからである。

富の增進は效用の增加によると共に他方に生産費の減少に由るものである。先に述べた富の最大量の原理は財の生産費は財の生産量を增加するに從ひ、總生産費が增加するばかりでなく、一個當りの單價も亦增加すると云ふ前提の下に建てられた理論であつた。然るに所謂大量生産をなす場合には生産費總額は增加することは勿論であるが、其の單價は反つて減少することを常とする。若し然らば一時限界效用と限界生産費と均等點に達したに拘らず、猶も生産量を增加するとき

は大量生産に由つて限界生産費が反つて減少し、富は更に增進することとなるのである。

二

然らば大量生産はいつでも必ず限界生産費を漸減せしめるものであるかと云ふに、決してさうではない。前に述べたやうに、短期間に於ては漸減せずして漸增するのを常とする。然らば長期間に於てはどうかと云ふに、主として土地から出る生産物は、長期と雖も其の生産量が或一定量に達した以後はその生産費は漸減せず、漸增するのを常とする。それ故農業では其の穀物棉花等の生産費は次第に高まるのである。若し我國の人口が一億に達し、多量の食糧品を要するやうになつたならば、從來の土地では之を生産することが出來なくなり、山間の瘠地まで耕作せねばならない。其の限界生産費は著しく上昇するであらう。之を**報酬漸減の法則**と云ふ。

かく自然の生産力に最も多く依頼する食糧品及び工業原料品は多量生産により生産費を漸減せしめない、反つて之を漸増せしめるを以て、富の最大量を示す限界效用と限界生産費均等點以上に生産する時は生産費の方面から見れば富を減少する。それ故生産費を上昇せしめることなく此の種の生産量を増加しようとせば勢ひ他に天然資源の豐富な土地を求め、之を開拓する外はない。卽ち之を一ヶ所に集中することなく、廣く世界の各地に生産地を求め、之を四方に散在せしめなければならない。

然るに人の勞働と資本との生産力に最も多く依頼する工業製品は大仕掛に多量に生産すればする程、次第に分業が行はれて組織に由る能率が増し、又適材が適所に用ひられて各自の能力は發揮され、又精巧な器械や生産上の技術が發達し易く、大經營のため之を應用すること可能となり、又無駄が省略され、此等に因つて其の限界生産費は著しく減少するのである。之を**報酬漸増の法則**と云ふ。それ故工業に於ては一ヶ所に集中し、大仕掛に之を經營することが有利である。

然るに工業に於て事業を集中し、大仕掛に大量に生産しようとせば多量の原料品を要し、遠地から之を取寄せなければならないのみならず、又其の製品を遠地にまで多量に販賣しなければならない。玆に於てか益々遠心力によつて世界の隅から隅まで擴張進展散在しようとする食糧品及び工業原料品の生産地と、益々吸心力によつて一ヶ所に集中し大仕掛とならうとする工業地との間に、相互に密接な關係を結ぶことが必要となるのである。然るに此の兩地に住む者の間には相互に面識があり交際があるのではない。それにも拘らず、各自が安んじて自己の生業を續け、其の生産物を交換し、有無相通じ得るには相互の間に確固たる信用が存在しなければならない。世界各地に於ける人と人との間に於ける個人的及び社會的信用こそは農業に於ける限界生産費の上昇を防ぎ、工業に於けるその減少を促進し、以て益々全體として財の生産費を減じ、富を増す根本的基礎である。

かやうにして人類社會は益々相互間の信用を基礎として密となり、互に有無相通じ、其の物的生活の福祉を増進せしめ得るのである。そして人類は次第に自然

の奴隷から脱し、相互信頼の下に密接なる社會を造つて以て此の自然を克服し、此の地球上の主人となり、進化の歩調を進めて行くのである。此故人間が相互に信頼することはその物的生活を益々豐富にする最大要件である。

三

現代に於て此の世界的經濟關係の中心に立つ者は地方でなく都市である。農業でなく工業である。工業が主動者となつて世界各地から其の原料品を集め、又製品を世界各地に販布するのである。そして現代に於ては次第に此の工業に參與する者のうち重要なる職能を果す者は勞働者にあれ、事務員、技術者、企業家にあれ、特に一技一能に熟練なる技術者でなくして、寧ろ人間としての全般的能力その品性の優秀な者である。現代の産業で最も多く要求されるのは此の種の人物であつて、卽ち銳敏なる才智、適確な判斷力、臨機應變の能、全幅の信賴を爲し得る品性がそれである。

人は云ふ現代は資本主義の時代であつて、巨大な資本が人を奴隷として居ると。決してさうではない。人間が益々資本を奴隷として驅使して自然を克服し、之に主人となりつゝあるのである。資本は人を奴隷とせず、增加すればする程益々之を有利に使用し得る才能と確實に之を管理し得る信用ある者を求めて之に使用されやうとして居るのである。マーシャルは其の著産業と商業に於て云ふ。

此の變化の基調はアメリカのフランシス・ウオーカーが敲いた。彼は既に千八百七十六年に之を語つた。「生産事業を創設し指導し、産業機關を組織し統制するに要する能力を有する者は……境遇の主人となる。人は資本家であるから雇用者となるのだと云ふことは最早眞實でない。人が資本を驅使するのは其の者が勞働を有利に使用し得る資格を有つて居るからである。此の産業の指導者に資本と勞働とは集中して各其の職能を果す機會を得ようとする」と。

現代の勞働は資本に向つて集中せず、反つて資本も勞働も有爲なる産業指導者に向つて集中する。今や工業に於ては事業は益々大仕掛となり、且つ或ひは縱に

原始產業から製品の販賣に至る各段階を連ね、或ひは橫に之と關係ある補助機關例へば銀行信託保險倉庫等をも兼營して一大軍團を組織し、各部は各部で活動すると同時に之を或一ケ所で統帥し各部に金融上又經驗上の便益を與へて居る。此の大事業團を統帥する者は特別に有能なる人物でなければ到底之をなす事は出來ない。

彼等が能く此の地位を得た經路を見るに、既に大資本を擁して居るためであることも尠くないが、多くは常人の堪え難き困苦を堪え忍んで練達堪能の士となつた者である。遠謀深慮、然も自ら責任を回避せず、大膽に危險を冒し、他より强制頤使補助せられる事を好まず、獨立自由の精神の旺盛な者がそれである。現代の異常な經濟的發達は實に資本の蓄積が原因でなく、之はその結果である。原因は實に此の種の產業指導者に在る。

現代は營利主義の經濟組織であると云ふ。然し乍ら現代の代表的且つ先頭に立つ產業指導者の精神の基調を一言を以て營利主義と云ふのは正確ではない。營利心は甚だ旺盛である。然しその行動の動機には相當の公共心を加味し、殊に自己の物的報酬よりも活動其の物に興味を感ずることが其の最も顯著なる特色である。之があつて大事業は經營せられ、多量生產をなし得られ、以て限界生產費を漸減せしめ、富を增進せしめたのである。かゝる人々が益々續出し來る時富は益々增進する。即ち資本の增殖ではない、人物の輩出が富を增すのである。

(三) 富の將來

一

かやうに富は社會に貧富の懸隔がある時はそれをなるべく少くし、分配をなるべく平等に近づけ、理想としては「各人は其の能力に應じて働き、必要に應じて消費し」得る時、效用は最大となり、富は最大量の原理以上に增加し、又他方多量生產に由り限界生產費を漸減せしめ得る場合には、財は一時限界效用と限界生產費と均等するも尚一時の損失を忍び生產量を增加することに由つて結局其の限

界生産費を低減し、富を増進せしめ得る。大量生産による限界生産費漸減は自然の力によることの多い農業には不適當であつて、勞働及び資本即ち人の力によることの多い工業に適する。此の集中的大量生産は世界人類の間に社會的信用が確立し、相互に有無相通ずること、殊に都市の産業に於ては生産に從事する者の特種の技倆よりも全般的人格が發達すること、就中其の産業の指導者の能力人格が向上し、かゝる人物が多數に輩出することにより可能である事を説いた。

人類社會の物的生活の福祉たる富は此の二方面から増進する。一つは財の效用の増加、即ち各人が自利を追求する以上に社會的に財の分配を公平にし其の欲望滿足力を増すこと、他は生産費の減少、即ち各人の全般的人格が發達し、且つ相互に信頼し有無相通ずることにより其の財の生産上費さねばならず、忍ばねばならない勞苦に對する代償が減少する事に因る。換言せば一方には社會全體の物的欲望滿足量の増加により、他方には人が活動の爲に活動を欲し自ら進んで犧牲の道を取らうとする精神の向上によるのである。

二

然らば人類の物的生活の福祉たる富の増進は此の二つの原因の中、其の何れに基づくことが多いか。これ我等の究めなければならない大問題である。マーシャルは其の經濟學原理に於て云ふ。

「彼等(リカルドウと其の弟子達)が餘りに執着し過ぎた、此の大眞理を今尚確言することは重要である。曰く、下等動物に在つては欲望が生活の指導者であるが、人類の歴史を解く鍵を求めんには、此の欲望が努力及び犧牲の形に變ずる所に眼を轉じなければならない」と。

我等の生活が高尚になればなるだけ我等は只物を得て樂しむだけで滿足しない。我等は食はんがために働かず、善き生活をなさんがために食ふ。衣食住それ自身が目的でなく、今一段高い生活をなすための一手段たるに留まるやうになる。只生存し只物慾を滿たすことが人生の目的でなく、自ら努力し己を犧牲として働く

ことを目的とするやうになつて、その生活は一段と向上するのである。それ故、人の經濟的活動の目的は消費であると云ふのは決して正しくない。寧ろ消費は更に高い人間的活動の手段であると云ふべきである。

各人が自己の生活のために勞働し、他人の補助によらずして獨立の生活を營むことは賞讃すべきことである。此の意味で食はんがために働くことは善き事である。然り、我等は何を食ひ何を衣んと思ひ煩はないために、衣食のために働くことを善事とする。然し乍ら生きるに必要なだけの財を獲得しても尙足れりとせず飽くなき貪慾にかられ一生を蓄財のために使用し、所有を人に誇り、又之を豪奢に費消して人に見せびらかすならば、その物的欲望滿足量の增加は決して眞實に富卽ち人の物的生活の良好なる狀態と云ふことは出來ない。

寧ろ獨立の生計を維持し得るだけの所得を得た後は活動のために活動を欲し、如何に自己の諸能力を發達せしめ得可きかに興味を有するやうになり、更に進んでは其の經濟活動を自己のためにせず、社會公共の利益增進のためになし、己が

快樂を犧牲として公共のために盡くすに至つて、各自の從事する職業と日常生活とは益々有意義となる。そして社會の富は益々增進するのである。卽ち物的「欲望が次第に努力及び犧牲の形に變ずるところ」に人類の進歩がある。

新なる時代、新なる社會は現代の產業の指導者の有つ特色美點を承繼するだけでは來らない。それに或物が加はることを要する。或物とは何を云ふか。第一は公共心である。營利のために事業を經營するのでなく、全く社會のため、人類の物的生活の眞の福祉を增進せしめる目的を事業經營の大方針とすることである。そして事業が困難であればある程、高貴なるものであればある程、その困難を喜び、その高貴を愛する心である。只單に事業に成功し、利益を得、巨萬の財を蓄へたと云ふ事は寧ろ之を恥とし、公明正大に事業を經營し、堂々と競爭し又互に協力するのみならず、弱者を助けて其の事業を繁榮せしめ、自己の部下を養成指導して多數の人材を作り、其の製品は優秀であつて、其の商標は何人も之に信用と尊敬とを拂ふものたらしめ、かやうな優美堅牢且つ實用的なる良品を安價に社

會に提供して以て社會一般の物的生活を豐富にすること等これである。

三

然らばどうしてかやうな精神は發達し得るであらうか。ベンジヤミン・キッドは其の著社會進化論に於て生物學的見地から此の問題に近づいた。然も彼は社會進化上、超合理的宗教的信念に重大なる契機を認め、且つ此の宗教的信念の本質を超自然的命令に對する絶對的服從、即ち犧牲心であると斷定した。彼は社會に二つの相反する原理が動いて居ることを認める。其の一つは分解的傾向であり、他は完成的傾向である。前者は各分子が自己の利益を主張することであり、他は宗教的信念によつて己を犧牲として社會的行動を爲さうとすることである。彼は此の後者があることに由つて、人々は自己の利益を捨てて彼等の屬する社會一般の將來の利益を計り、以て社會の進化を生ぜしむるものであると云ひ、此の犧牲心は宗教的信念から來り、超合理的であつて打算的でなく、之ありて自然淘汰が

人類の種族の上にも行れる、然も之によつて社會は倫理的基礎の上に立つ、種々なる生ける現象は之から發生する。此の現象の科學的研究は啻に西洋文明の生命史であるばかりでなく、世界全體の實際の進歩に於て複雜なる社會的、及び政治的運動の下に橫はる發展力の性質に關しても亦、多大の光明を投ずるものであると云つて居る。

マーシャルも亦宗教が世界歷史の進歩發達上重要な原因であることを肯定して彼の經濟學原理の劈頭に「世界歷史を形成した二大動因は宗教と經濟であつた。こゝかしこに一時は軍事又は藝術の熱心が優勢であつたけれども、宗教的及び經濟的影響は一時たりとも其の位置を退けられたことはなかつた。彼等は殆ど他のもの全部と懸合ふ位重要であつた。宗教的動機は經濟的動機よりも强烈である。只其の直接の作用は經濟程廣くはない」と云つて居る。

然り、宗教的動機は經濟的動機程社會の人々の間に廣く行き亘らない。然し其の純なものに至つては甚だ强烈であつて衣食住に對する念慮を排除し、只管に眼

を人間以上の實在者に注ぎ、そこより來る新な力によつて人間至上の理想を追求する。かゝる人物が多く輩出する時、社會全體が之に指導せられて其の道念は高められるのである。現代の產業の將軍である大實業家が若し彼等の精神を理解し自らそれを體達するやうになり、又かやうな人物が續々產業界に活動するやうにならば、社會は革まり、新時代が來るのである。

四

若し富卽ち人類の物的生活上の福祉の增進が最も多く此の公共的活動慾及び目前の快樂の犧牲心が盛んとなることに因るとすれば、國の興るは何によるか、國民に此の精神が盛んとなるからである。國の衰ふるは何によるか、物的欲望滿足の多きを求めて、努力及び犧牲心が減退するからである。我等は歷史に照して此の事の眞理なるを知る。天然の資源豐富なる北米合衆國に於て、現今其の富は資源豐富なる南部、ラテン系舊敎徒の住む地よりも、寧ろ天惠の少ない北部、清敎

徒の子孫の地に增したのは、天然の資源よりも國民の性格がより多く富を增す一證とするに足る。又歐洲の歷史について見ても諸國民を指導する勢力が次第に南國から氣候の稍寒冷にして、物の豐ならざる北部新敎主義の國に移動したのは此の證據である。

さらばよし天然の資源乏しくとも、國民の犧牲心が強く活動力が大である時は其の前途を憂ふることを要しない。憂ふべきは國民が遠き將來を思うて目前の快樂を犧牲とし、勞働を欲する慾念が日に薄らぎゆき、それ以上に物的慾望の滿足を得ようとすることである。一見背理の如く思はれるのは、物的幸福は之を求めない處により多く增進すると云ふことである。「汝のパンを水の上に投げよ」（傳道之書十一章）とある。經濟的合理主義は其の愚を笑ふ。されど曰く、「多くの日の後に再び之を得ん」である。打算的でない努力のための努力慾、將來を望み目前の快樂を犧牲とせんとする犧牲慾、殊に世界人類のために己を獻げやうとする精神が盛になりて、各人は必要に應じて消費し、其の能力に應じて充分活動するこ

とが出來るのである。こゝに經濟社會の眞の自由が存在する。

五

我等は人類の社會的生活に於ける此の眞の自由のため經濟社會に働くべきである。それは胃袋の欲望滿足のためでなく、靈魂の欲求を滿たすために生業に從事する事である。それ故多くの人々が「必然」と見る大自然と戰つて之を征服しようとする。又「社會的必然」と戰つて之に打克たうとする。或は深山幽谷と戰ひ、大沙漠と戰ひ、海洋と戰つて之が主人となり、又懶惰・享樂・嫉妬・無情・憎惡・鬪爭と戰つて、勤勉にして質實、獨立にして一致、競爭にして且つ協調の社會となさうとする。之がため現代は新に靈界の新大陸發見者マルチン・ルーテルを要すると同時に物界の新大陸發見者クリストフア・コロムブスを要する。

底ひも知らぬ大海原、嘗て何人も航海したことのない四顧水又水の大洋の彼方に、コロムブスは新大陸を發見しようとして乘り出したのである。西南から吹き

來る逆風に波は逆巻き、船は木の葉のやうに飜弄され洋上に漂ふこと既に數十日、船員は極度の困憊と、どこまで往つても大陸を發見し得ない失望と、更に航海を續けるならば海洋の彼方に大瀑布があつて船諸共それに吸込まれるであらうとの恐怖とに驅られ、彼等は中途から歸航を迫り、徒黨を組んで反抗した。彼自身も亦日夜焦慮のため疲勞と疑惑とに襲はれ、只一人苦杯を飲んだ。彼の前途は混沌であつて、自然も人も彼に敵し、彼の目的は不可能のやうに見えた。

然も彼は毅然として確信の上に立ち、自已と周圍の人々とに打ち克つたのである。やがて不可抗と見えた自然も亦彼に服し、西南からの逆風はやみ、東風は吹き來り、彼は此の順風に力を得て混沌たる暗黑の大洋を乘り切り、遂に彼方に新大陸を發見したのである。そして近代史は始つた。

不可能か、然りそれは不可能であつた。然も彼は之と戰つて之に勝ち、新時代を創めたのである。あゝ人類よ、汝の新時代が來る前に此の不可能が横たはる。若し之を避けるならば汝は沈滯して滅びるであらう。若し勇敢に之と戰はゞ、不

可抗とせられ、汝の敵と見えた自然も社會的諸力も皆汝に味方して汝を援け、遂に汝の新しきアメリカを發見するであらう。そこに社會の眞の自由がある。

さらば自然と人生の不可抗力と戰つて之に勝ち得させる力は何處から來るか。それは自然以上人間以上の實在者から來る。彼を信じて此の力が與へられるのである。そして遂に自由なる社會を建設し得るのである。そこに人類の向上進歩がある。富は之に從うて增進する。（經濟學論集大正一四・一一）

（完）

昭和十三年七月廿五日　印刷納本
昭和十三年七月三十日　第一刷發行

富の増進 ★★
定價二十錢

羊門文庫
9

版權所有

著者　江原萬里

發行者　名古屋市中區流川町二十番地　横井秀子

印刷者　名古屋市中區流川町二十番地　横井憲太郎

發行所　名古屋市中區流川町二〇　振替名古屋四一〇三八番　羊門社

發賣所　名古屋市中區流川町十八　振替名古屋九四四五番　一粒社

一粒社印刷所印刷

讀書子に寄す

羊門文庫の發刊に就て

この文庫はドイツのレクラム文庫、日本の岩波文庫に範をとり、基督教文學を主とし、其他宗教哲學文藝科學等種類の如何を問はず、洋の東西その古今に亙つて眞に古典的の價値あり、生命ある不朽の書を極めて簡易なる型式に於て逐次刊行し、あらゆる人々の要求に應ぜんとして生れたものであります。從つて價格を低廉にし携帶に便とし、外觀を顧みず內容を嚴選し、この文庫の特色を發揮し、もつて羊門文庫發刊の使命を果したく思ふものであります。その目的達成のために世の讀書子の御指導と御支援を熱望して止まない次第であります。

本文庫は七十頁以內を★一ッ、百二十頁以內を★二ッ、百七十頁以內を★三ッ、二百二十頁以內を★四ッ、二百七十頁以內を★五ッとし、★一ッを十錢の定價とし廉價普及を主眼といたします。

羊門文庫

エピクテタス 眞の自由 外一篇	羊門社編輯部	★
現代宗教詩鑑賞	長谷部俊一郎著	★★★
バンヤンの「天路巡禮」梗概	金澤常雄著	★
靈の力	アンダーヒル著 前川眞二郎譯	★
アシシのフランシスの音信	マツケイ著 鈴木二郎譯	★★
幸福の書	井乃香樹著	★
ジョン・ウエスレー	バットラー博士著 横井一粒子譯	★
愛吟（和歌・俳句・川柳）	鈴木二郎撰	★
富の增進	江原萬里著	★★
柯公隨筆	大庭柯公著	★★

730
229

0
9